

劇場版 —ハイスクール
ルD×D— 補講授業の
イミテーション

ユウナ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

劇場版仕様っ！ ということで、兵藤一誠の新たな物語です。

本編と絡みつつも、無くてもいいような構成になっております。

(某名探偵の漆黒の追跡者なんかを思い出していただけだと、分かりやすいかと思いません)

オリ神器といっても一つしか登場しない予定です。

物語としては、原作の16巻後の話となっております。

(16. 5巻とでもなるのでしょうか?)

ですので原作16巻未読の方は、お読みになってからご覧ください。

原作の雰囲気を壊すのは私も好きではないので、なるべく原作の空気そのままできたいと思っております。

しかし、エロは少なめになりそうです（笑）

それでは、劇場版 ―ハイスクールD×D― 補講授業のイミテーション。始まります！

目次

開幕	1
修行、始まりますっ！	5
トレーニング、始めるよっ！	18
修行、開始だっ！	30
D×D、交流会ですっ！	53
アーシアとデートしますっ！	64
いよいよ戦闘開始ですっ！	104
一時撤退ですっ！	121

開幕

「ぐう……」

地に叩き伏せられる赤龍帝せきりゅうていこと兵藤一誠ひょうどういつせい。

「どうした？　こんなもんか？」

その相手は……同じく赤龍帝である兵藤一誠。

余裕そうにへらへらと笑いやがって……。

俺はなんとか四肢ししに力を入れて立ち上がる。

「なんだ、まだいけるんじゃないか。なら、こつちもいかせてもらおうぜ！」

あいつは嬉しそうに笑い、籠手に力を集中させる。

『Boost！』

あいつが更にパワーを増大させた！　チツ、本物の俺より強いとかありかよっ！

「ドラゴンショットオオ！」

パワーを増大された大きなドラゴンショットが俺に向かって放たれる。

「くっ……」

すんでのところで上に飛んで回避し、こちらドラゴンショットを放とうと相手を見

クソ！ お手本みたいな戦い方しやがって！

でも、俺だって――。

「ああ、こんなもんじゃねえさ。赤龍帝の力は！」

「なっ！」

煙の中から立ち上がる俺の姿を見て、奴が驚く。

「まあ半分はもらっちゃまったけどな」

「っそうか！ 半減の力を使ったのか！」

そう、ついこの前にユーグリッド・ルキフグスと戦っていたときに使えるようになったはくりゆうこう白龍皇の半減の力。

修行であの小型ドラゴンを一体くらいなら、瞬時に出せるようにしてたんだ。

「だけど、半分はくらったんだろう。鎧も瞬時に修復したようだが、生身の体にダメージが通っていないわけじゃない。隠してても分かる」

『どうやら、向こうの相棒のほうが頭はよさそうだな』

酷いっ。俺たちは二人で一つの赤龍帝だろう。そんなこと言うな！

『ああ、すまなかつたな。だが、俺はお前のほうがいい。たとえば奴が相棒より強くともだ』

ドライグ……っ。

その言葉に男泣きしそうになる俺に、ドライグが忠言する。

『だが、奴のほうが実力が上だ。このままではやられてしまうぞ』

そんなことは分かっているよ、ドライグ。さくて、この状況どうしたもんかね？

兵藤一誠、ピンチですっ！

そもそもなぜこんなことになったのか……。それは、「D×D」のサブリーダーである孫悟空にヴァーリとともに修業を受けていたところまで、話は巻き戻る。

修行、始まりますっ!

「儂が稽古をつけてやろうかねい」

そのように仰ってくれたのは、「D×D」のサブリーダーである初代孫悟空だ。

「D×D」の仮本部である、駆王学園でたむろしていたところに、そんな風に初代に声をかけていただいた。

あの伝説の妖怪である孫悟空に稽古をつけてもらえるなら、これほど嬉しいことはないっ!

テロリストたちの暗躍を何度も防いできた実力者って話だもんな。京都でもジークフリートをふつとばしたり、曹操とも余裕で渡り合えていたし、そりやそうか。

なんでもサマエルの毒にやられたヴァーリを治療したのも、初代だって話だ。

いや、さすが孫悟空の名は伊達じゃないってことだなっ!

そんな人に稽古をつけてもらえれば、俺はもつと強くなれる。

俺はあいつに……あの偽物の赤龍帝に負けた……。

あのまま勝負が続いていたら、ギヤスパーが割り込んでくれなかったら……やられていたのは俺のほうだ。

1対1でも俺はあいつに勝てるようになりたい!

そのためには、この前初代が指摘してくれたように、スタミナの消費を抑えて真『女王』^{クイーン}の形態をすこしでも長く維持しなければならぬ。

よし、がんばるぞと気合を入れていたところ……。

「初代殿。私にも稽古をつけてもらえないだろうか」

「ヴァーリっ!」

話を横で聞いていたヴァーリが、初代に頭を下げて頼んでいた。

「いいぜい。お前さんと赤龍帝の坊やは同じ課題を抱えておるからのう。まとめてやるほうが効率的じゃわい」

そう、ヴァーリも俺と同じ問題を抱えている。スタミナの過剰消費だ。

それさえ解決できたら、こいつが倒せない奴なんてほとんどいなくなると思うんだ!

それだけ、あの『極覇龍』状態というものは凄いなと思う。

クソ、まだまだ俺のライバルは遠いぜ……。

だが、俺だつて負けてられねえ!

俺の新しい力、以前に白龍皇から奪った力が変化したもの。あの小型のドラゴンだ。

あの力を使いこなせるようになって、スタミナの消費を抑えることができれば、俺は

もつと強くなれる!」

「よろしく頼む」

「よろしくお願ひします!」

俺とヴァーリ、二人がそろって頭を下げてお願ひする。

二人同時の頭を下げる日が来るなんてな……世の中は分からないもんだぜ。

「では、修行場へ行こうかの。どこかい場所を知らんか?」

そういうことなら……。

「ウチの家の地下が修行場になってるんですけど……そこでどうですか?」

あそこなら俺たちが本気で暴れても、大丈夫だと思うんだ。修理はグレモリー家がし

てくれるし。

「ふむ、それならばよさそうじゃの。ではそこへ行くか」

そう言つて――。

トン、と初代が地面を棒で叩くと。

「おおっ!」

魔法陣が出現していて、俺たちを一瞬で地下の修行場へと運んでいた。

「仙術を応用した移動術式だ」

分からなかった俺に、ヴァーリが説明してくれる。

へー、そんなのもあるんだな。

そういうえば、美猴も前に似たようなのを使っていたっけ。

「さて、お主ら。儂に全力でかかってこい」

「ほう」

初代の挑戦的な言葉を聞き、面白そうに口を歪ませるヴァーリ。

「えっ。二人がかりですか？ それはちよつと……」

「心配せんでも良いわい。全盛期の二天龍ならいざ知らず。今のお前さんたちなら、二人がかりでも負けやせんよ」

そういうことなら、お構いなくっ！

まずは『女王』にプロモーションして、力を底上げする。

そして――。

『Welsh Dragon Balance Breaker』
ウェルシュドラゴンバランスブレイカー
 よしっ！ 禁手化。そこから更に――。 !!!!!!

「――我、目覚めるは王の真理を天に掲げし、赤龍帝なり！」

真『女王』になるための呪文を唱えていく。

「無限の希望と不滅の夢を抱いて、王道を往く！ 我、紅き龍の帝王と成りて――」

「「「「」汝を真紅に光り輝く天道へ導こう——」」」」
『カardinal クrimson フull ドrive!!!』

俺の体の鎧が紅へと変化し、今までとは段違いのオーラをその身にまとわせる。

これが今の俺の全力っ！ 覇ジャガーノート・ドラゴフ 龍とは違う新たな力を得ようした結果だ。この

真『女王』状態は、以前よりも多少だが安定してもきている。

ヴァーリも、既に禁バラン・フレイカー 手の鎧を身にまとっている。

「俺も最強の形態になろうか」

そう言つて奴は、呪文を唱え始める。

「我、目覚めるは——律の絶対を闇に墮とす白龍皇なり——」

光翼が白く輝きだし、ヴァーリの魔力が更に高まつていく！

宝玉から歴代白龍皇たちの声も流れ込む。

『極めるは、天龍の高み！』

『往くは、白龍の霸道なりッ！』

『我らは、無限を制して夢幻をも喰らう！』

相変わらず、闘争心に満ち溢れた意識たちだ。

あいつは歴代白龍皇と戦いを通じて、分かりあった。俺は必死こいて説得していった

ていうのに……。まったく、凄いやつだぜ！

「無限の破滅と黎明の夢を穿ちて覇道を往く——我、無垢なる龍の皇帝と成りて——」

ヴァーリの鎧から発せられる神々しい白き眩きが次第に強くなつていく。それに伴い形状も変化していく。

「「「汝を白銀の幻想と魔道の極致へと従えよう!!」」」

『ジャガーノード オーバードライブ!!!』
『Juggernaut Over Drive!!!』

眩い光が収まり、白銀の鎧を身にまとつたヴァーリが姿を現す。

通常の鎧よりも色合いが白銀に近づき、各宝玉の色もより深い董色へと変化している。

へー。ヴァーリの白銀の鎧つてこうなつたのか。前回見たときは一瞬で、よく分かんかったからなあ……。それだけ最上級死神プルードと極覇龍状態のヴァーリは実力がかげ離れていた。

今も横にいるだけで、そのあまりのオーラに俺も吹き飛ばされそうな程の重圧を感じるっ!

「兵藤一誠、俺が前に出る。——お前は後ろから援護射撃をしろ。俺に近づきすぎれば、お前の力も半減しそうだからな」

「応っ!」

てか、さすが初代孫悟空！あの最上級死神プルートを一瞬で倒したあのヴァーリを相手に、互角に渡り合っているっ！

エネルギーがチャージし終わった。これなら――。

「どけえええつ、ヴァーリっ！　いくぞおおつ！」

俺の叫び声を聞いたヴァーリが瞬時に横にずれる。よしっ！　その位置なら当たらない。

「クリムゾンブラスタアアアアアアアアア！」

『F a n g B l a s t B o o s t e r ! ! ! 』

紅色の極大のオーラを発射し、初代を狙う。初代は避けようとせず、棒を前に構えて迎え撃つ姿勢を見せた。

俺の真『女王』の砲撃を喰らえば、いくら初代とはいえタダでは済まないはずだっ！
当たれえええつ！

紅色のキャノン波動は見事に初代を捉え、大爆発を起こす。煙が立ち込める中、下がってきたヴァーリと会話を交わす。

「これでどれくらいダメージを与えられたと思う？」

「さあな。だが、いくら初代殿でも無傷とはいかないはずだ」

だよな。あの獅子の衣をまとったサイラオーグさんにもダメージを与えられたんだ。あれから更に鍛え上げた俺の砲撃でダメージを喰らわないわけないっ！

……と思っていたのだが。

「っ！」

「ウソだろうっ！」

煙が晴れ、中から姿を現した初代は……衣服こそ多少破けているものの、健在だった！

馬鹿なっ！ あの砲撃を真正面から食らって無傷っ!? そんなことが……。

驚く俺たちに初代は告げる。

「いい攻撃だったぜい。久々にわしも全力防御を強いられたわい。じゃが、実力者には隙を作って撃たねば、この通り無傷で済ませられてしまう。攻撃は当てなければ意味はないが、ただ当てればよいというものでもないぞい」

敵しいお言葉だ。確かにユークリット・ルキフグスにもキャノン撃ったが、ドラゴンショットで相殺されてしまったしな。あの小型ドラゴンを使ったような感じで、敵の不意について攻撃を当てなければならぬってことか。

でも、あの飛龍は今ほどの攻撃は跳ね返すことは出来ない。パワーが大きすぎるからだ。

なら、もう一度っ——。

「ヴァーリ、もう一度前に出て攪乱してく——」

ガシューウウン。

ヴァーリの鎧が通常状態に戻ってしまった!?

『極覇龍』つてのはそれだけスタミナ消費がハンパないってことか!

「そちらの攻撃はもう終わりかい? なら、次はこちらが攻める番じゃぜ」

そう呟いて、初代はこちらに突っ込んでくる。

二人で左右に分かれて迎え撃とうとするも——

「ぐはぁ!」

「ヴァーリっ!」

俺よりも消耗しているだろうヴァーリが先に狙われたかっ!?

ヴァーリは棒の突きによって遙か後方に吹っ飛ばされていった。

「序盤から極覇龍の状態になるのは良い判断ではなかったな。その後の戦闘継続が難しくなる。今の状態で使うならば、ここぞという一撃で使わんと。格上の存在相手では、そのように戻って消耗している瞬間を狙われるぞ?」

なるほど、と納得し……ている場合じゃない。次は俺の番だ。

『Solid Impact Booster!!!』

右腕だけトリアイナ版『戦車』^{ルーク}のものを形成。このぶ厚い籠手である棒の攻撃を防御しようとしたが――。

「伸びよ、棒よ」

初代のその一言で、棒が高速で俺に向かって伸びて――。

バガアアアッ!

「ぐはあっ!?!」

ぶ厚い俺の『戦車』の籠手を貫いてきた!

くそお……。真『女王』状態なら籠手の防御力も上がっているはずなのに……。

吹っ飛ばされるものの、なんとか空中で体勢を立て直し、初代を見据える。

「ほう、今の攻撃を食らって空中で体勢を立て直せるか。その籠手の防御力は凄まじいようじゃの」

お褒めの言葉をどうもありがとうございますっ! でもあなたの攻撃力は桁違いすぎだ!?! 俺の籠手を突き破ってくるなんて!

「そりゃ、偉じゃからな。じゃが、お前たちが敵にしておるのは、そのような強者たちばかりじゃ。この程度で驚いてはいかんぞ」

くそう、俺とヴァーリの二人がかりで歯が立たないなんて……。どれだけ強いんだ、あのじいさん!?!

『そりや、今のお前よりは遥かに強いだろうさ。初代孫悟空はもう何百年もその力を練磨している。成長途中の今のお前ではまだまだ敵わんだろうさ』

そうか……。俺が生まれる遥か前からずっと修行を続けているんだもん。そりや実力に開きがあつて当然だ。

だけど……………。

「兵藤一誠。無事か」

「ヴァーリ、お前こそ大丈夫なのか!？」

戻ってきたヴァーリに尋ねる。

「ああ、攻撃を食らう直前に防御したからな……。それほどダメージは受けていないさ」
そうか。どうやら吹っ飛んでいったのも、後方に飛んで攻撃の衝撃を減らすためだったらしい。

「兵藤一誠っ！」

「ああ、いくぜ！」

なんとかあのじいさんにダメージを負わせたい！ たとえ一撃でも。二天龍がそろってこれじゃあ、赤龍帝の名が廃るつてもんだ

いくぜえ、ドライグっ！

『応っ！ いくぞ相棒っ！』

その後、二人で初代にかかっていったものの、これといったダメージは与えられず、そのまま修業は終了した。

俺たち、もつと頑張りますっ!

トレーニング、始めるよっ！

二天龍が初代孫悟空に修行をつけてもらった後、僕とゼノヴィアも初代にトレーニングをつけてもらうようお願いしたんだ。

僕らも強くないとね。

魔帝剣グラムを扱いこなせるようにして、邪龍ジャリゆうたちとの戦いに備えないといけない。

なにせグラムには龍ドラゴン殺スレイヤーしの力が宿っている。一撃ではグレンデルに効果は望めなかったものの、幾度も攻撃を当てるうちに、その効力を発揮した。龍殺しのダメージは邪龍に蓄積していくんだ。蓄積させれば、相手の龍殺し耐性を突破してダメージを与えることが可能だ。

つまり、僕はそれだけ長く魔帝剣グラムを振るえなければならぬ。

僕もイツセーくんのことを言えないね。グラムを振るうたびに体力を猛烈に消耗させてしまっている。そのため昨日の戦闘では数分間の使用で反動がきてしまい、ろくに動けなくなってしまった。

『騎士ナイト』の僕が動けなくなるなんて、あってはならない事態だ。

僕には防御力がない。だから敵の攻撃は防ぐのではなく、躲さなくてはならない。

——僕は邪龍クロウ・クルワツハとの戦いのときに、またイツセーくんの役に立てなかった。

あれから修行して鍛えたつもりでも……このザマだ。

イツセーくんは力を呼び込む赤龍帝だ。今回の騒動を切り抜けられたとしても、今後もこういつた事態に巻き込まれる可能性は十分にある！

だからこそ、僕には力が必要なんだ……イツセーくんとともに戦えるだけの力が！

そのための修行だ。——ゼノヴィアも自身の力不足を感じているからこそ、この修行に参加してくれたんだと思う。

「ああ、その通りだ。木場祐斗。私だって、もつとこの聖剣を自由自在に扱えなければならぬことくらい、解っているさ」

そう、ゼノヴィアの聖剣『エクス・デュランダル』はその名の通り、エクスカリバーとデュランダルを合体させた特別な聖剣だ。その潜在能力はすさまじいものがある。

しかし、ゼノヴィア自身その能力のほとんどを引き出し切れていないことを自覚しているのだろう。だからこそ、あれだけ拒否していたテクニクタイプの修行にも付き合ってくれるようになった。

「失礼だぞ。私だって日々考えているんだ！」

今の時点では、その言葉に説得力が感じられないけども。これからの修行の成果で僕

に示してみせてよ、ゼノヴィア。

「分かった。今に見ている、このエクス・デュランダル能力のすべてを使いこなしてあげる！」

「気合十分だね。初代、トレーニングよろしくお願いします」

「お願いします」

二人で初代に頼み込む。

「ああ、かた苦しい挨拶はいいさね。聖魔剣の。ま、その魔剣に慣れるのも、二天龍と同じく実戦方式がいいじやろうて。かかってきなさい」

そういつて、初代は構えを取る。

僕とゼノヴィアは距離を取って、初代を見た。

——静かだ。闘気は感じられるものの、殺意ほどでない。その身に力をためているのは解るが、どうくるかは予想もつかない。

これが仙術を極めた者の戦闘スタイルなのか……恐ろしい。僕が相対して恐ろしいと感じたのは初代だけではない。例えば、サイラオーグ・バアル。彼は自身の非常識なまでに鍛え上げられた闘気や気迫を、相手に向けて放出することで委縮させ、自身の攻撃につなげていた。

彼と正面きって向かい合うのは恐ろしい。その力の波動を肌で感じられ、本能が危険

だと叫ぶ。相對して、あれほど緊張感につつまれた敵もそうはいなかった。

しかし、初代はそれとはまったく正反對の怖さだ。

静かすぎる。その実力はサイラオーグ・バアルを遥かにしのぐものだというのに、何も感じ取ることができない。感じとらせてくれないのだ。

これでは相手の力に対して、備えることができない。

——僕のようなテクニクタイプには天敵だね。

しかし、初代は動かない。あくまで僕らの出方を待つつもりらしい。

——なら、

「ゼノヴィア、前に出てくれ」

「分かった」

いまだパワー重視の戦い方を得意とするゼノヴィアを前へ出す。初代がそれに対してカウンターをしてこようとしたり、躲そうとしたときは、僕がゼノヴィアをフォローして攻撃を当てる算段だ。

まずは一撃、話はそこからだ。

「はああ!」

ゼノヴィアが剣を振りかぶる。しかし初代はそれを避けようとせず、受けてみせる構えを見せた。

——カウンター狙いかつ。なら、これでどうだ！

「ソード・パース魔劍創造っ！」

僕は地面に手をつき、初代の足元に大量の魔劍を創造した。

これなら、体勢が崩れてカウンターなど出来ないはず！

——しかし、

「ぐああー！」

「ゼノヴィアっ！」

初代は僕の創造した魔劍を最小の動きで回避し、ゼノヴィアに棒の突きを入れた！

不規則に創造させた魔劍の発生を見切った!?

にわかには信じがたいことだが、初代程の実力ならばあり得るのかっ！

ならば、これでどうだっ——。

「騎士団よー！」

僕の周囲に現れる竜騎士たち。これは僕の禁手の一つ、グロリーイ・ドラグ・トルーパー聖覇の龍騎士団だ。

これでゼノヴィアを後方へ移動させ、そして同時に初代へと攻撃もさせるっ！

「すまない、助かった。木場」

「どういたしまして。ダメージは？」

初代の攻撃を食らって、タダで済むわけがないからね。ゼノヴィアの戦闘続行は難し

いとも思ったんだけど……。

「どうやら、手加減してくれたらしいな。まだ体は十分に動くツ！」

僕の取り越し苦労だったようだね。初代は僕らに修行をつけさせることに重きを置いていたのか、その絶大な攻撃力を発揮しないようだ。

なら、そこにこそ僕らが付け入る隙がある！

「ふむ。龍騎士たちの速さは良いが、技術はまったく反映できておらんようじゃのお……。これでは奇襲に使えても、正面切つての戦いではまるで役に立たんぞい。精々足止めでできればいいとこさね」

厳しいお言葉だね。……でも、仰られる通りだ。

今の僕の騎士団には、速さは反映できていても、技術はほとんど反映できていない。

それでは、初代ほどの実力をもつ相手に対して、傷を負わせることは難しいだろう。

「敵をかく乱するには十分かもしれないが、仙術を極めた者や、気配察知の上手い者にはとても使えたもんでありやせんぞい。もつと精進せい」

「はいっ！」

しかし、この方のお言葉は本当にタメになるね。イツセーくん、君もこのように叱咤されたのかい？……なら僕も負けてはいられないな。

「ゼノヴィア、作戦を話すよ」

「よし、聴こう」

僕はゼノヴィアに作戦を伝える。さっきの騎士団での攻撃でダメだったということは、生半可なく乱では、初代はものともしないということだ。だからこそ、ゼノヴィアの協力が必要になる！ エクス・デュランダルの方が！

僕の作戦を聞いたゼノヴィアは不満げな顔を浮かべた。

「また、私に突っ込ませる気だな」

「じゃあ、ゼノヴィアは僕の動きをフォローできる？ できるなら僕が前に出てもいい」その答えを聞いたゼノヴィアは「分かったよ、やればいいんだろうやれば」と己を納得させていた。これもテクニックタイプの練習だと思つて、頑張つてよ！

「話し合いは済んだかのお……。次はこちらからいかせてもらうぞい」

そう言う初代は地面を棒で、トン、と叩いて強烈な閃光を發した！

「目くらましかつ」

「ゼノヴィア下がって！ 僕がフォローするっ」

僕らと初代の間に、魔劍創造で剣山を発生させ、来るであろう初代の攻撃を躲そうとした。

それが功を奏したのか、初代が目の前に来る頃には閃光は収まっていた。

「騎士団よー！」

僕は再び騎士団を初代の足止めに使い、ゼノヴィアから例のモノを受け取る。

よし……これでっ!

「この騎士団では、儂を倒せんぞい。もっと攻めてこんか」

半数の騎士団を蹴散らした初代がこちらに迫る。

「これならばどうだ!」

ゼノヴィアが剣を鞘から抜き、溜めていた聖なる波動を一気に初代へ向けて放出した。

彼女お得意のデュランダル砲だ。初代は悪魔ではないから、抜群の効き目とはいえないものの、まともに食らえば彼とてダメージは免れない!

しかし、初代はそれを棒の一薙で振り払った! 馬鹿なつ、あれだけの動作で!?! の何気ない一振りに、一体どれだけの力が込められていたというんだ。

強敵だ。間違いなく、僕らが戦ってきたなかで一番の。勝てるはずもない。しかし……一太刀でも入れたいと思うのが、剣士の性だ!

ゼノヴィアと残りの騎士団が果敢に初代へと挑むも、それを初代はなんなく撃退していく。だが……。

「じゃから無駄じゃと……ぬう!」

初代の背後から、突然現れた龍騎士が魔帝剣グラムで彼を切り裂いたのだ。

「聖魔劍の。お主か」

兜のマスクを外し、僕が答える。

「ええ、そうですよ。さきほどの騎士団発生のときに紛れ込ませてもらいました」

「しかし……姿が消えておつたようじゃが……それは——」

「——ゼノヴィアの聖劍は特別で、一時的にならエクスカリバーの一部を取り外して使うこともできるんです」

そういつて僕が懐から取り出したのは、エクスカリバー・トランススピアレンシー透明の聖劍だ。

「その聖劍の力か……面白いことをするねい」

「さすがのあなたでも姿の見えない敵に不意をつかれては、どうしようもなかったみたいです」

ゼノヴィアのデュランダル砲ですら、僕の姿がないことを気づかせないための布石。相手が仙術を極めた孫悟空となると、僕の拙い幻術程度では容易に見抜かれてしまう。

だからこそ僕は自身の幻影をつくらなかった。一瞬で隙をつくり、一気に攻めることで初代に一太刀を浴びせられた！

これなら——

「油断は禁物じゃのう。聖魔劍の」

背後から声がした瞬間、

ドンッ!

なにか棒のようなもので殴られた衝撃が僕とゼノヴィアを襲った。

「ぐううー!」

「ぐああー!」

あまりの衝撃に吹き飛ば僕とゼノヴィア。

そんな……どうして……。初代は僕が確かに今切り裂いたはずなのに……。

「お主のしたことと同様じゃわい。それは儂の分身さね」

そう言っ、初代は自身の分身をかき消した。つまり、さつき僕が切り裂いたのは分身だったのか……。本体のほうは健在みたいだ。

いつ入れ替わったのか……。と一瞬考え、答えに行き着く。

「あの閃光のときですな」

答えながらも驚愕していた。本物の気配など、まるで感じなかったからだ。

「正解さね。いいこと教えてやろうぞい。一瞬も気を緩めてはならん、相手を打倒したと確信したとしてもじゃ。その一瞬の隙が敗北を呼び込むぞい……。今のお主らのようにな」

「はい……。精進します」

「私には難しそうだ……」

さつきまでののが分身だったということは、初代孫悟空は分身ですら、あのデュランダ
ル砲を弾き飛ばすほどの実力を持っているということなのか……信じ難いことだね。

さつきの突きで僕とゼノヴィアはもう立てずにいた。……仙術特有の攻撃だろうか。
体の芯にまでダメージが通っている。力が入らない……。

「お主らは、今日はここまでじゃやて。次も控えておることだしのう。お主ら、テクニク
タイプを目指しておるんじやろう？ なら、自分がどう攻めるかではなく、相手がどう
攻めてくるかを考えるべきじやぞい。相手の一撃にカウンターを入れてこそ、テクニク
タイプじゃ」

そうだ……僕は初代にどう攻めるかを考えるばかりで、彼がどう攻めてくるかなんて
考えもしなかった。……まあ彼が自身の攻撃をこちらに察知させなかったというのも
あるけどね。

ゼノヴィアには普段から色々言っているけど、僕だつてテクニクタイプとしてはま
だまだだったんだ……。敵の攻撃に翻弄されるばかりで、相手に隙をつくることがまっ
たくできていなかった。それを再認識させてくれた意味でも、この修行は本当に価値あ
るものだった。

「もつと精進せい。二人とも」

「はいー！」

僕とゼノヴィアは異口同音に返事をした。

イツセーくん、君の背中はまだ遠いよ……。

修行、開始だつ！

聖魔剣の木場祐斗とデュランダル使いのゼノヴィアとの訓練を終えたばかりの初代がこちらにやってくる。

「初代、俺たちにも訓練をつけてほしい」

「おおう、バアルの獅子王か。ええぞい。ただ……後ろにおけるのもまとめて面倒をみたほうがいいのかい？」

そう……今俺たちは兵藤家地下のトレーニングルームにいる。

俺はここに初代がいると聞いて、眷属を引き連れて兵藤家を訪れていた。どうやらあの二人の稽古をつけた後らしい。

今回俺たちがわざわざ兵藤家を訪れたのには理由がある。

それは初代の滞在だ。

いくらチーム「D×D」を結成したとはいっても、皆にはそれぞれの生活がある。

特に初代は忙しい身で、今この時を逃せば稽古の機会は少し先になる可能性が高い。

つまり、初代が滞在している今このときに、二天龍だけではなく俺たちも鍛えてもら

おうという算段でやってきたのだ。

「眷属の者たちも前回のリアスとのゲーム以来、自分を磨きなおしたいと意気込む連中ばかりで……俺と共に初代の修行を受けさせられればと思ひまして」

「なるほどのお……いいぜい。まとめて面倒を見てやろうさね」

煙管キセルを吹かしながら、初代はうなずいた。

「礼を言う」

頭を下げようとする俺を初代が止める。

「堅苦しいのは苦手さね。それに若手を育てるのも老人の役目さね。それこそわしがこのチームにおける理由じゃしのお」

このチームの最大戦力にして、指南役。それが初代孫悟空の立ち位置だった。

「あと数日は儂はこの町に滞在するでの。その間、お前たちの面倒は見てやるつもりじゃから、急いで駆けつけてこんでもよかったんじゃぞ」

どうやら俺たちが急いでここに来たのを見抜いていたらしい。

そのおかげで眷属の皆を招集しきれずここについてしまったのだった。

招集できたメンバーは『兵士』のレグルス、『女王』のクイーシャ、『騎士』のフールカス、そして『戦車』のブネだけだ。

「そうですか。ならば俺たちもここに滞在して、その間初代に稽古をつけてもらおうとし

ましようか」

俺がそう告げると、初代は満足そうに笑んで続けた。

「そうかい。向上心があつていいことさね」

初代がここに数日滞在するのなら、あとで残りの眷属も呼ぶとしよう。あいつらも強くなつてもらわんとな。

「ではそろそろ修行を開始しようかのお。おつとその前に——」

そう言うのと初代は棒をコツンと地面にあてた。

何をしたのかと一瞬考えて……感じ取った気配から理解した。

「あの二人を地上に送ったのですね」

尋ねると、初代はうなずいた。

「うむ、リビングに転送しておいたわい。邪魔になつても困るし、巻き込まれてもいかんからのお」

わざわざ離れた二人を転送するということは修行はかなり広範囲に影響を及ぼす規模になるということだ。

修行の内容は察するに、実戦形式か。

それも当然だと思われる。

例えるなら誰かに勉強を教える場合だ。教師が教える対象の学力を知りたいと思う

のは当然だ。

つまり、私たちがどこまで戦えるかを測るつもりなのだろう。

修行の最初からこうした実戦方式でやるのは、そういつた意味合いもありそうだ。

「そつちは……5人かね。ふうくむ、どうしたものかのお……」

なにやら悩んでいる様子の初代。

考えがまとまっただのか、初代はニヤリと口元を笑ませて俺たちを見上げて告げた。

「二対五でやろうかのお」

そういつて初代は、自分の髪の一部を抜き取り息を吹きかけると――。

「さあ、かかつてきなさい」

初代の分身が作り出され、二人の初代が左右対称にポーズを決める。

「俺が本体のほうとやろう。お前たちは分身とやれ」

『っ。サイラオーグ様、しかし――』

反論してきたレグルスを俺は諫めて告げる。

「伝説の妖怪である孫悟空とは、一対一で戦ってみたいのだ。それに神滅器を持つ眷属の主たちは、神仏と戦えるまでに強くならなくてはいけないのだろうか?」

俺が初代に確認すると、その通りだとうなずいた。

「そういうわけだ。下がれ、レグルス」

俺はそう言いながら、黒い戦闘服を着込む。

『……はっ』

それを見て、しぶしぶといった様子でレグルスは下がった。まったく、主思いの眷属だな。俺はお前のような眷属を持って幸せものだよ。

さて、戦闘開始だっ——。

まずは、両手足に負荷をかけていた枷を外す。

ドンッ！ と大きな音をさせて、両手足の枷の紋様が消えていく。

周囲に力を解放した影響で、風圧が巻き起こり、足元の地面が大きく抉れ、クレーターができた。

解放した闘気を身にまとって初代の本体に向かい飛び出す俺。

初代は如意棒を構えて、こちらの拳と打ち合わせてきた。

ドンッ！ ガンッ！

俺たちの攻撃が打ち合うたびに、このトレーニングルームに轟音が響き渡る。

「おお、やはり凄まじいパワーじゃのお。若いもんにしては、充分さね」

初代が俺を褒めるが、それを俺は一蹴する。

「ですが、邪龍やりゼヴィムたちと戦うなら、この程度ではいかんでしょう……あなたか

ら出来るだけ技術を吸収させてもらおうっ!」

「いい心がけさね」

俺の答えに満足したのか、口元を笑ませていた。

そこから俺と初代の激しい攻防が始まった。

まず、初代に上から拳を落とすように打ち込む——それを初代は横にずれて躲し、こちらに棒を伸ばして突こうとする。

顔を狙ったその一撃は首を傾けることでなんとか回避し、今度は初代を蹴り上げようと右足を上げる。

すると今度は初代は飛び上がり、上から棒をたたきつけるように振り下ろしてきた。それを後ろに跳んで回避してから再度拳を打ち込む。

初代は着地してから、その拳を棒で易々と受け止めて横に流した。

俺は流された体ごとあえて前に倒れこみ、そのまま慣性を利用して回し蹴りを繰り出す。

それを初代は棒を支えにして飛び上がることで避けて、そのまま棒を横薙に振るう。

これは躲せないと判断し、鬨気を全開にし両腕をクロスさせて防御しようとした。

ガアアアン! と凄まじい音をさせて地面とぶつかりながら吹き飛ばされた。

……なんてダメージだっ……！！ リアスの『騎士』が持つ聖剣デュランダルの聖なる波動すら防いでみせたこの闘気をまとっていったというのに……。

棒の横薙を庇った腕が痺れて、力が少し入らなくなった。

俺は驚愕しながらも空中で体勢を立て直し、初代と向き直った。

「生身で受けてそのダメージとは……さすがだねえ、師子王の。赤龍帝と並ぶだけはあるわい」

「それはどうも。俺は今度こそ兵藤一誠を倒したいのでね」

そうは言ったものの、今までの打ち合いで俺はこう感じていた。

戦いづらい、と。

こちらの速さに簡単についてこられる上に、打撃も容易く打ち合わせてくる。

しかもそれをあの小柄な体でだ。

初代の背は小さく、人間に例えるなら幼稚園の年長児くらいの高さしかない。

あの小柄な体で飛んで、跳ねてを繰り返しこちらの拳を受け止める様はまさに驚愕の一言に尽きる。

こんなにも体格差のある者と戦ったことはないので、戦いづらいことこの上ない。しかも相手のほうが強いのだ。

それにこちらは全力で打ち込んでいるが、向こうはまだかなり余裕がありそうだ。

俺の力に合わせてくれていているのが分かる。

……悔しいものだな。やはり初代孫悟空クラスの敵と戦うにはバランスブレイクをするしかないのか。だが、いつかはこの拳だけで――。

俺は最強の形態となるべく、自身の最強の眷属兼神滅器を呼び出す。

「レグルスウウウツッ！」

一方、分身と戦う眷属たちはどうなっていたのだろうか。

その様子をあとから聞くとこんな感じだったらしい――。

「さて、来ないのならこっちからいくぜい」

初代の分身がこちらに向かってくる。

『ベルーガ殿、クイーシャ殿、ラードラ殿足止めをお願いします』

レグルスが彼らに頼む。

「はい。おまかせを」

「私とアルトブラウの神速で翻弄して差し上げましょう」

「我が火炎で焼き払ってくれよう」

それぞれが自分の役割を理解し、動く。

それはレグルスが戦闘力を解放するまでの時間稼ぎだ。

まずはフルカスが初代を足止めするために動く。

「いざ、参る」

愛馬のアルトブラウの神速で初代に詰め寄る。

「おお……なかなか速いのお。じゃが——」

分身初代はなんなくそれを躲し、フルカスに対して棒の突きを入れる！

「くうっ」

初代の猛烈な突きをなんとかランスで防ぐフルカス。どうやら分身とはいえ、その身のこなしは青ざめた馬の速さに並ぶようだ。

「分身でありながらこれ程の速さだとは……」

苦々しく顔を歪めるフルカス。それもそうだろう。自慢の愛馬の足と初代のはいえ分身の速さに並べられたのだから。

「生憎と儂は分身にかなりの力を託せるほど鍛えておるのお。若いヒヨっ子の相手くらいは分身の儂で充分さね」

「舐めるなっ！」

その挑発に乗ったのか、幻影を複数出現させて高速戦を仕掛けるフルカス。あの幻影は本物と同じ気配を放っており、見分けることはほぼ不可能。しかもそれぞれが本物と同じくらいの速さを持っている上、攻撃を仕掛けることも可能だ。

「これはこれは。儂と同じように分身で攻撃してくるか。じゃが——」

幻影を一体、一体冷静に打ち倒して処理していく分身初代。

「分身の使い方は、儂もよく分かっておるさね。序盤に突っ込んでくる者の中に、まず本物はおらんのお」

分身は初代の十八番だ。フルカス以上に圧倒的に使い慣れている。故にその特性や使い方も完璧に見抜かれているようだ。

「分身の完成度は、若いもんにしては充分さね。この調子で精進せい」

そう、フルカスの幻影はいわゆる質量をもった幻影で、分身とほとんど同じような効果がある。

しかしその幻影を蹴散らされて、劣勢に立たされていくフルカス。援護をしたい味方の眷属も、高速で動く両者を前に手出しがしづらい状態が続いていた。

「お褒めの言葉、ありがたく頂戴いたす！ しかしこれで終わるとは思わんでください」
幻影を次々を消され、追い詰められていくフルカス。

それもそうだ。速さは両者ともにほぼ並んでいるものの、初代にはフルカスにはない豊富な戦闘経験や妙々たる洞察力がある。この高速戦がどうなるかは目に見えていた。

予想通り高速戦を制して、先に一撃を入れたのは分身初代だった。

しかも、その一撃で馬と分断されてしまった！

「馬との息はピッタリじゃのお。じゃが、馬なしでは高速で動けない点はいかんの……聖魔剣の『騎士』を見習うんじゃの」

その通りで、フルカスは馬なしでは高速で動けない。『騎士』の駒で自身の速さも底上げされているものの、分身初代の相手をするには不足が過ぎた。

「ぐうー！」

苦しそうなうめき声を上げるフルカス。馬なしでも分身に立ち向かおうとするが……。

「遅い」

一言で一蹴され、棒の横薙を喰らい吹き飛ばされてしまった。

「ぐうあああああつー！」

仲間がやられる様子をただ見ているわけではなかった『戦車』のブネが前へ出る。

「次は俺の火炎を食らわせてやる！」

巨大なドラゴンに変身したブネが大質量の火炎を吐くが……。

「ほーれ、ほーれ」

仙術の応用なのか、火炎のなかをもものともせず突っ込んでいく分身初代。

「馬鹿な！ 我が炎がきかんといいのか！」

「赤龍帝の火炎と比べると、まだまだじゃやて」

そう言うと、初代はブネに対して棒の突きを入れた。

「ぐうああああああ!」

ドラゴンと化したブネを棒の一突きで倒すと、次の狙いをクイーシャに定める。

「なら、これでどうです!」

『女王』のクイーシャが様々な属性の魔力の波動を乱れ撃つ!

物理攻撃で歯が立たないのなら、魔力による攻撃ならばどうか。

「ふむ、なかなか練られた魔力じゃ。……しかし」

分身初代はクイーシャの乱れ撃った魔力攻撃を、飛び跳ねて回避や棒で弾き返したりを繰り返し、防ぎきってみせた。

「格上の相手に対して生半可な魔力攻撃が通用すると思ったのかねい。アバドンの者ならば『穴』^{ホール}を使ってこんか」

「くっ……」

確かにクイーシャの力の神髄は『穴』にある。前回のリアスとのゲームでも、それを使って『雷光の巫女』である姫島朱乃に勝利しているのだ。

それを重々承知しているのだから……その時のクイーシャは悔しそうな顔をしたものの……やがて、笑んでこう告げた。

金色のオーラを迸らせ、光の放流の如くとなつて分身初代に詰め寄る!

その凄まじい様にクイーシャも容易には両者の戦闘範囲に踏み込めずにいた。

両者が全力でぶつかり合う。その体格差を想像していただければ分かるだろうが、小さき者が巨軀を圧倒する様はまさに圧巻の一語に尽きる。

『ぐうう!』

分身初代の猛攻に、徐々に勢いを失いつつあるレグルス。

俺も経験したから分かるが、あれほど小さな者が自分より素早く、そして力強く攻撃してくるとするのは戸惑いと困惑を抱かせるものだ。

それにレグルスは巨大であるため、なおさら小さき者に攻撃が当たらぬことにいら立ったに違いない。

さらにその戦い方もこちらの攻撃をすべて躲し、そのあとの隙を的確に攻撃してくるというなかなか厭らしい戦い方を繰り返していたそうだ。

「どうした、どうした。戦闘中に冷静さを欠いてはいかんぞ」

『チイツ!』

分身初代の言う通りその時のレグルスの体からは過剰で無駄と言えるほどのオーラが迸っていた。

聞いていて思うのは、レグルスがいら立つても力を暴走させてはいけないと、あえて

そのような戦い方をしたのかもしれない。

感情が高ぶればその分、力のコントロールは雑になるものだからな。

その様子を見かねたのかクイーシャがレグルスの隣に立つ。

「レグルス、相手に吞まれてはいけません。落ち着くのです！」

その一喝に冷静さを取り戻したのか、レグルスは過剰なオーラの迸りを収めた。

『すみません、クイーシャ殿』

「落ち着いたのならば、それでいいのです。私に考えがあります、レグルス。あなたは前に出て初代の攻撃を誘ってください。私が隙を作るので、あなたはそこを狙って全力の一撃を入れてください」

クイーシャの作戦の内容を悟ったレグルスは、

『ハッ！』

と気合を入れ直し分身初代へ向かっていく。

『はああああっ』

獅子の爪が振り下ろされる。当然ながら分身初代は避けるが、地面に当たった爪が生んだ衝撃波の風圧でその小さな体が吹き飛んでいく。

「くううー! ならば、これでどうじゃ」

吹き飛ばされながらも、初代は棒を伸ばしてレグルスを突こうとしたが――。

「その瞬間を待っていました!」
クイーシャがレグルスと彼を狙う棒の突きの間に、アバドン家のみ使える特殊な技である『穴』を出現させた。

その『穴』に吸い込まれていく分身初代の棒。

「――っ」

その様に驚く分身初代。

クイーシャの『穴』は、すべてを飲み込む文字通りの円形の穴を空間に生みだし、そのなかで相手の攻撃分解したり、別の『穴』から放つこともできる。

つまり、その時のクイーシャの狙いは――。

「後ろかっ!」

分身初代の後ろに出現した『穴』から棒の突きが放たれるっ!

『穴』たちは異界を通じて繋がっているからな。相手の攻撃をうまく吸い込めれば、別の『穴』から放出可能なのだ。

自らの攻撃に当たるわけにはいかないと、身を捻って躲す分身初代。

そこで生まれたわずかだが、確かな隙を逃すはずもないレグルスは――。

『ゴガアアアアアアア！』

唸り声とともに相手の体に覆いかぶさるようにして、猛烈な打撃を繰り出す。

ガン！ ドガンツ！ ガガアアンツ！

その連続攻撃にたまらないとばかりに、その猛攻の波から逃れる分身初代。だが、いくつか打撃は当たったようである……。

「うーむ、さすがに痛いさね。分身とはいえ、儂にこれだけのダメージを負わすとは……さすがは物理攻撃力に特化したバアル眷属じゃのお」

分身とはいえ、初代の防御力を貫通してダメージを与えることに成功していた！

『仕留めきれなかったか……ならば、もう一度っ——』

「二度同じ手が通用すると思っておるのか？ 舐めるのもいいかげんにせいっ！」

そう言つて分身初代が狙つたのは——クイーシャだった!?

「っ！」

咄嗟に『穴』を出して防御しようとするものの間に合わず——。

「きやあああああああ！」

棒による突きをモロに食らってしまった。

その攻撃で完全に気を失ってしまったクイーシャ。

「これで『穴』を使つてのカウンターはできんぞい」

『クイーシャ殿っ!』

『穴』の出現は間に合わなかったものの、防御の陣は組んでいたはずのクイーシャを一撃とは……やはり初代の攻撃力は凄まじいものがあるな。

「彼女の弱点は、反射神経さね。いくら『穴』を使って防御しようともそれよりも早く攻撃を繰り出されれば、間に合わん。それではいかんさね」

確かにクイーシャは前回のリアスとのゲームでも、防御の反応が間に合わず兵藤一誠に敗けた。

相変わらず、的確な修行のポイントを戦闘中にも関わらず教えてくれるものだな。さすがは初代だ。

俺がレグルスと呼んだのはこのようなタイミングだったらしい。

「レグルスウウウウツッ!」

『ハッ!』

俺の呼び声にすぐさま応え、推参するレグルス。

俺はそれを確認してから、獅子の衣をまとうための呪文を唱えていく。

「我が獅子よッ! ネメアの王よッ! 獅子王と呼ばれた汝よ! 我が猛りに応じて、衣と化せエエエツッ!」

レグルスから発せられる金色のオーラを体にまとわせ、兵藤家地下のトレーニングルーム全体を振るわせるっ！

ドオオオオオオオオオッ！

俺の足元にクレーターができ、周りに生じた塵やほこりが衝撃波で吹き飛ばされていくっ！

『バランス・ブレイク禁手化ッ！』

『バランス・ブレイク禁手化ウウウウウッ！』

神々しい金色の輝きの中から出現した俺は、その身に獅子の全身プレート・アーマー鎧を身に着け、その場に立っていた。

……極力パワーは抑えたつもりだが、家に影響が少しは出たかもしれない……。あとでリアスに修理費を出すか。

そのようなことを考えつつも、頭部の兜のたてがみをなびかせて初代に向かうッ！

「()からは一対一じゃな」

そう言っつて、分身を消して一対一の勝負に持ち込んでくれる初代。

「本気で参るっ！ いくぞおおおおお！ レグルスウウウウッ！」

『ハッ！』

胸の獅子の顔からレグルスが応じてくれる。

そこからはさきほどの攻防を超える凄まじい打撃戦が始まった。

ドンッ！ ガンッ！ ガガアアアアン！

俺たちの攻防で次々とトレーニングルームの地面にクレーターが出来ていく。

だが、どちらの攻撃もいまだクリーンヒットしていない。初代はその身のこなしでこちらの攻撃を華麗に躲し続け、俺は初代の攻撃を拳で真正面から打ち返していたからだ。

「さすがじゃのお。打撃力だけなら赤龍帝以上じゃな！ 魔力による攻撃などお主の戦闘スタイルには必要ないと感じるほどさね」

「俺には肉体しかありませんからねー」

凄まじいまでの速さで繰り出される棒の突きや横薙を躲しつつ、答える。

だが、今までの攻防で初代の棒の間合いは拵めた。次はギリギリで避けて、カウンターを入れるッ！

初代が飛び上がり、棒の横薙を繰り出してきたっ！

ここだっ！

ギリギリで後ろに下がって避けて、カウンターを入れようとしたその瞬間――、

ガアアアアアンッ！

顔面に棒の横薙が直撃した！ 何故っ……と一瞬考えて、答えに辿り着く。

「間合いを見切ったと思っただかい？ この如意棒は伸びるんじやぜ？ それを忘れてはいかんのお」

そう、あの棒は如意棒だ。初代の意思で変幻自在に伸びたり縮んだりするのだ。

あの棒に間合いなど、あつてないようなもの。それを今までの横薙の攻撃で織り込んでこなかったから、失念していた。

やはり強いッ！ 全力で打ち合いながらもこちらの隙を作ろうと、頭を冷静に働かせている。

初代自身の熟練した力の強さもさることながら、その冷静な思考こそが強さの所以だろうな。戦いながら、俺はそう実感していた。

「また、こうすることもできるさね」

さらに上空に飛び上がった初代が棒を極太にして、突きおろしてきた！
太くなった棒の直径はざっと見積もっても7〜8メートルはある。

ぐっ……これはとても避けられたものではないっ!?

「レグルスウウッ！ 全力防御だアアア！」

『ハッ！』

上からくる巨大な突きを受け止めようと、防御にありつた力の力を込めるッ！

ガアアアアアアアアアアアアアアアアアンツッ！

受け止めた瞬間、凄まじい爆音とともにとてもつもない衝撃が俺たちを襲うッ！

これは……あと何秒も受け止められ続けるものではないッ……！！

足が地面にどんどんめり込んでいつて、埋まっていく。

なんとか脱出しようと四苦八苦するものの、足が埋まっていてはしようもなく

……押し潰されそうになる俺たちだつたが——。

フッ、と今までかかっていたとてつもない衝撃が消えた。

棒の突きを止めた？……いや、次の攻撃がッ——。

ドガアアアアアアアアアアアン！

初代が突きを止めてそのまま払いの動作に入つたことは分かつたが、反応できずにモ

口に攻撃を食らってしまった——

うう……初代の薙ぎ払いを喰らって俺は……。

横を見ると初代が傷の治療をしてくれていた。

「大丈夫かい？　一応、手加減はしたのじやが」

どうやら俺はあの攻撃を喰らって気絶し、兵藤家のリビングに運ばれて治療を受けて

いるようだ。

『大丈夫ですか？ サイラオーグ様』

レグルスやほかの眷属たちが心配そうな視線をこちらに向けてくれる。

「いや、大丈夫だ。いい修行になりました、初代。さすがは伝説の妖怪。今のおれたちではまるで歯が立たない」

それを聞いて初代はニヤリと口元を笑まして言う。

「いやいや、まだまだそなたらには伸びしろがあるさね。儂のトレーニングでこれから実力をどんどん高めていってやるかのお。安心せい」

修行はまだまだ始まったばかり……そう気を取り直す俺たちだった。

D×D、交流会ですっ!

リビングで寝ていたサイラオーグさんが起きたようだ。

「起きたんですね。調子はどうつすか?」

「問題ない。すまないな、ソファアを占領してしまつて」

「いいんすよ。それくらい」

同じ「D×D」チームのよしみだ。これくらいなんともない。俺としてはむしろ、サイラオーグさんにベッドで眠ってもらいたかったのだが……バアル眷属の皆さんが「主様はすぐ起きるだろうから、ソファアで構わない」つて言うんで、仕方なくこうなつていた。

「イツセー、そろそろお夕飯にしない?」

リアスが二階から降りてきてそう言つた。

確かに……もうこんな時間になつていたんだな、気づかなかつたよ。

初代との修行のあと、俺とヴァーリはそれぞれ別の修行を行つていた。

俺は魔力貯蔵量の増加。ヴァーリは魔力放出の効率化だ。

初代が言うには、俺には貯蔵できる魔力の絶対量が少ないものの、それを効率よく扱

える術はヴァーリより上。対してヴァーリは自分の力を効率よく扱えないものの、その身に有する魔力の量は絶大。

だから俺とヴァーリはお互いから物事を学ばなくちゃいけないんだけど……それがそう簡単にはいかない。

俺は真龍と龍神から得た力を使ってこの体を復活させてるから、前よりは多少魔力貯蔵量も増えてるんだけど……やはり、まだまだ足りない。

限界まで魔力を使って、回復させて、また使い果たす……という練習方法で魔力貯蔵量を増やせるそうさ。地味で効果をなかなか実感しにくいけど、これしか方法はないらしい。

だから初代との組み手のあとはずっとこれをやっていたんだけど……そのおかげで、体をあまり動かしていないにも関わらずもうくたくただ。

俺の横でヴァーリも相当苦勞してたな。

あいつは生まれ持った才能のおかげで、苦戦なんてことをあまり経験してこなかったんだろうな。だから自分の力を効率よく扱う術など気にも留めてこなかったんだろう。

ま、あいつのあり余る魔力の全てを使い切るなんてことも最近はめつたになかったんだろうさ。

それに白龍皇の奪う力もあった。あいつは自分の力を節約して使うなんてことな

かったんだらうなあ……才能の無い俺にとつてはうらやましい限りだ。

初代はヴァーリーの力の扱いの苦戦っぷりを見て、こうも言っていた。

「莫大な力をその身に宿しておるからのお……逆に細々と力を使うということが難しんじゃないらうなあ」

なんてうらやましいっ……じゃなくて、あいつでも強くなるのに苦労することがあるんだなあ……。

俺の横で自分の力の使い方に苦心している姿を見て、ちよつと親近感を覚えてしまったのは内緒だ。

ま、あいつのことだからすぐにコツを掴んで上手くなるんだらうさ。

俺も必死こいて修行しなきゃな。

「そうだな。そろそろお腹も空いたし。サイラオーグさんたちも食べていきませんか？」

リビングに揃っているサイラオーグさんたちも誘ってみた。せつかくだしね。

「いいののか？ リアスの作る手料理を俺たちも食べても」

「いいですって、別に。それに俺、サイラオーグさんと一度ご飯を一緒に食べてみたかったんすよ」

これは俺の本音だ。サイラオーグさんとは拳で語り合ったが、食卓で語り合うことは

していなかったからな。一度お茶したいと、戦ったあとですっと思っていたし。

機会がなかったから今まで出来なかっただけで……でも今はサイラオーグさんたちと一緒に夕ご飯を食べる絶好の機会だ！

「それならご馳走になるうか。よろしく頼む」

「ええ、いいわよ。ふふ、皆で食べたほうがおいしいものね」

リアスが笑顔でうなずいてくれた。

ああ、やっぱり俺の彼女は最高だなあ……とリアスを見詰めていると……、

「イツセー……」

「リアス……」

リアスもちちらを見詰めてきて……そこに二人の世界が形成された。

ああっ……やっぱり俺の彼女はなんて素敵なんなんだ……こんな人が彼女だと思うだけでいまだに俺は——

「——いつもこんな調子なのか？」

「はい、基本的に」

サイラオーグさんのそんな質問に木場が答えていた。

「見ていて微笑ましくなるよな」

「お似合いの二人よねっ!」

ゼノヴィアとイリナが茶化し、

「あらあら、またですよ」

「……見詰め合いですぎです」

朱乃さんと小猫ちゃんが嫉妬し、

「もうパパったらまたえろげですか……いけない子ですねえ……」

アーシアが現実逃避を……もとい、ちよつと壊れていた。

って、

「アーシアアアアアアアア! 大丈夫かつ!」

「はっ……今わたしは何を……」

我に返ったアーシアをゼノヴィアが「なんでもないんだ。アーシア」と慰めていた。

うーん、最近アーシアの精神状態が不安定になっているような気がする。

原因は間違いなく……あのパンツ龍王……もとい、五大龍王の一角である黄金龍君

だ。

あいつがあんなにも変態だなんて……仮にも龍王の一角なのに……。タンニーンのおつちゃんやヴリトラは立派なのになあ……。先生と契約していて鎧と化していた頃には、あんな性格だとは想像もしてませんでしたよっ!

まあ契約の対価さえきちんと支払えばアーシアをちゃんと守ってくれるから、そのところは心配ないんだけど……。しかし、その契約の対価がアーシアのパンツだったりスク水だったり……。なんて破廉恥なっ！

俺もアーシアの服を何度も洋服破壊していたから人のことは言えないが、それでも毎度毎度パンツやらなにやらをあの変態龍王に差し出していたら、アーシアの精神が壊れてしまうんじゃないだろうか……。お兄ちゃん心配っ！

どこかでアーシアの心のケアをしないとイケないな……。そう固く決心しつつ、リアスたちの作る晩御飯の用意を待つ。

……と、そこにここから出ていこうとするヴァーリを見かけた。

「ヴァーリ、俺たちと一緒に飯食べていけよ」

俺がそう言うのとヴァーリは、

「そういつた馴れ合いは苦手でね」

とつれなく返してきた。

なんだよ、人が折角誘ってやったのに。

「そんなこと言わずにさあ……。ヴァーリも食べていきなよ。スイッチちゃんのご飯おいしいわよ」

「そうです。一緒に食べましょう?」

「そうか……まあ偶にはいいかもしれないな」

黒歌とルフエイに言われて考えを変えたのか、俺たちと一緒にヴァーリも食卓を囲むことに。仲間の言うことは素直にきくんだな。ヴァーリも出会った当初とは変わってきているのかもしれない。曹操との戦いするときも黒歌を傷つけられて激怒してたし。こいつにとつても仲間は大切な存在になっているのかもな。

「そういや、アーサーはいないんだな?」

「はい。お兄様は私を家に戻してくれるよう交渉に出かけております」

アーサーから頼まれたルフエイとの契約。まだ正式には行っていないが俺はその気だ。レイヴェルも反対しないと思う。

それで冥界のヒーロー（恐れ多いことだが）である俺と契約すれば、ルフエイは家に戻るかもってアーサーは言ってた。その段取りを現実的なものにするために直接話をつけにいったんだろうな……妹想いのいいお兄ちゃんだ。

サーゼクス様しかり、ライザーしかり。俺のまわりには妹に優しいお兄ちゃんが多い気がするな。

「美猴はそれに付いて行ったのか?」

「そうにや。おおかた初代とあんまり一緒にいたくないんだと思うにや」

あいつ初代にまだに苦手意識持つてんのかな? 同じチームなんだからそれもい

ずれは克服してもらわないとな。

ということでヴァーリもつれてリビングに戻ってきた俺たち。

料理もそろってきたのか、おいしそうな匂いが漂ってくるなあ……。

リアスたちが家に来てから、家で食べる食事が美味しいのなんのつて。

オカルト研究部に入るまでは、ファーストフード店を利用することも割とあった俺にとつて、この家庭の変化はほんつとありがたい！

「あら、イツセイきたのね。もう出来てるわよ？ その、白龍皇も食べるのかしら？」

黒歌やルフエイが食べることは今までもあったけど、ヴァーリがこういうのに参加するとはなかなかイメージしづらいんだろうなあ……。

「ああ、お邪魔でなければ俺もいただこう」

「あらあら、うふふ。大集合ですわね」

確かに……サイラオーグさんたちやヴァーリたちもいるんだもんな。家にこんな人が集まったのつてこれが初めてじゃなかるうか。

「「「いただきまーす」」」

そして、チーム「D×D」皆での夕食が開始された。

いやー、相変わらずリアスたちが作るメシはうまいっ!

サイラオーグさんたちも美味しそうに食べてたな。

黒歌も相変わらずたくさん食うし……。あ、やっぱりって感じだけど、サイラオーグさんやヴァーリもガツガツ食べてたよね。あの二人はイケメンだからそうやって食っても画になるんだこれが。

皆が食べ終わって、リビングでそれぞれくつろいでいるとき、不意にヴァーリが廊下のほうに出ていくのを見かけた。

もう帰るのか? と思っで一応声をかけに行こうとすると――、

「……………」

なんか窓から月を見上げて物憂げにしているなあ……。

なにか悩んでることもあるのかね? そう思っって俺はとりあえず声をかけてみる。

「どうしたんだよ、ヴァーリ」

「……………」

ヴァーリは俺を一瞥したあと、こう告げた。

「いや、リゼヴィムのことを少し……考えていた」

「おまえのじいさんなんだっけ?」

そう、今回のテロを引き起こしているリゼヴィムはヴァーリの祖父にあたる人物なの

だ。

「ああ、俺を捨てるように指示した者だ。……お前も聞いていただろうか？」

「ああ、訊いてもないことをペラペラ喋る野郎だったな」

あいつのテロの理由はただの子供の我がままみたいなもんだ。

でもそれで全世界が滅ぶかもしれない。それに異世界に住んでる生き物たちにも迷惑がかかるだろう。そんなことは絶対に許してはいけない。

俺も異世界の乳神さまとの接触で、責任の一端をちよつとは担っているからな。

だからこそ、なんとしても俺たちの手で止めないといけない。そう思ってる。

「あいつの……あいつのやろうとしていることはグレートレッドを倒すこと。その目標は俺も持っていたものだ。あいつと同じことをやろうとしていた俺は所詮、あいつと同じような存在なのかと思ってしまっただけ」

「……………」

そんなことっ…………。

「そんなことねえ！ あいつは邪魔だからグレートレッドを倒すだけだ。でも、お前は違う。白龍神皇になるんだらう！ そのための目標としてグレートレッドを倒すんだらう！ だったらあいつなんかとは、全然違うさ」

「……………っ！ ふふっ……………そうか。そうだな」

俺の答えを聞いたヴァーリは……少し笑みを浮かべていた。

なんで俺がヴァーリを励ましてんのかね。でもこれが俺の本音だった。

邪悪を振りまくあいつとお前は違うって。まあどつちにしろ次元の狭間のことであ

るからグレートレッドと誰とも戦わせるわけにはいかないんだけどね。

なんか今のヴァーリ見てたら、励まさないやいけないような気分になっちゃった。

なんですかね。

ま、でも俺たち「D×D」今日も仲良くやっています!

アーシアとデートしますっ！

いやー、修行ばかりにかまけていられないのが赤龍帝のつらいところだ。

休日は修行で潰れる上に、平日は当然学校がある。休まるときがない。

でも俺以外のメンバーは才女や才児ばかりだから、学校での勉強にも全然苦勞して様子もない。

特にゼノヴィアは最近、なんだかやたら勉強に熱心なようだが……。

吸血鬼のところで話してた目標ってのに関係してるのかね？

部活を休んでシトリー眷属と一緒に生徒会室にいることもあるんだぜ？　ほんとど

うしちやつたんだか……。

俺にはそれがなんなのか全く想像できないが、リアスたちはどうやら知ってるようだ。

まああいつから話してもらうまで待とうと思ってる。

皆が初代と修行の日々を過ごすなか、学校生活の中にも変化があり……、

「あ、兵藤君。ちよつとこの荷物運ぶの手伝ってくれない？」

「あ、花戒さん。はい、分かりました」

花戒さんの運ぶダンボールを俺も持つ。

「生徒会の中で唯一の男手の元ちゃんがいなくなっちゃったからねー。こういう作業が大変で」

「ええ、でしようね」

匙は今この駒王町にいない。というのも――、

「兵藤、タンニーン様と話をつけて欲しいっ!」

「へ? 何の?」

突然で何の話か分からず、間の抜けた返事を返してしまったのだが……。

どうやら匙はタンニーンのおっちゃんに修行をつけて欲しいそうなのだ。

「ああ、皆は初代様と必死に修行してるだろ。それを見てたら、やっぱ俺も早く禁手に至るために何かしなくちやいけなないんじやないかと思っつてな」

なるほど。初代との修行もしたいけど、今はサイラオーグさんとかも来てるし、初代がいくら達人とはいえ、その体は一つだもんな。匙ばかりに構ってはもらえないだろう。

シトリー眷属は、これからソーナ会長が運営する『学校』の件もある。修行に専念するには今が一番いいタイミングだろう。サイラオーグさんもその『学校』の講師として呼ばれていると聞いている。サイラオーグさんがわざわざ今、初代のもとに修行にきているにはそういった理由もあるんだってさ。

ま、ドラゴンの修行と言えば、やっぱりドラゴンとやるのが一番だよな！

俺もタンニーンのおつちゃんと一緒に修行して、禁手に至ることが出来たんだし。

「そう、そうなんだよ！ お前はタンニーン様との修行で禁手に至ったんだろ。なら、俺もやっぱりタンニーン様と修行をしなくちゃいけないのかと思ってさ。俺に足りないものは、お前と比べるとそういう経験なのかと思って……」

俺の禁手に至った経緯を参考にしてることか。案外、匙に足りなかったのはドラゴンとの実戦形式での修行かもしれないな。

よしっ！ そういうことなら――、

「いいぜ、タンニーンのおつちゃんに頼んどいてみるよ。多分OKしてくれると思うぜ」
おつちゃんは面倒見いいドラゴンだからな。ただ……、

「おつちゃんとの修行は厳しいぜ？ 覚悟しとけよ」

「おう、死ぬ気で頑張るさ。会長にもいいところ見せたいしな！」

と張り切っていた。おっちゃんのごきは厳しいが、匙は俺に負けず劣らずの根性の持ち主だ。きつと乗り越えて、禁手に至ってくれるだろう。

それと驚いたことがあるんだが……どうやら匙がタンニーンのおっちゃんのもとに修行をすると聞いて興味を持った家のマスコットキャラが一人。

「我もヴリトラについていく」

「オ、オーフィスもついていくのか!？」

「ともだちのともだちはともだち、とイリナが言っていた」

つまり、匙の手助けがしたいってことか？

「我、ヴリトラの力になりたい」

「お、そうか……その、よろしく頼む」

匙も若干たじたじになりながらも、その申し出を受けた。

「龍神さまのありがとう(´▽`)加護を頼むぜ」

「我、ヴリトラを見守る」

龍王と龍神がついてるんだ。匙の修行はきつと捗るに違いないっ!

「ありがとう。兵藤君」

「はい。どういたしまして」

花戒さんの手伝いが終わったあと、一年生の様子を見ようと教室の前を通りかかってみた。

すると――、

「ギヤスパ―君休みなの!？」

「風邪かしら? 心配だわ」

「家の用事だそうよ」

「レイヴェルさんも家の用事で休みだそうだわね」

そう、ギヤスパ―とレイヴェルも駒王町を離れていた。

ギヤスパ―は、グリゴリの研究機関に行っている。意識不明のヴァレリーを安全に保護してくれるところへの付き添いと、自身の神器に関することだ。

ヴァレリーはあれから目を覚ます気配はない。

やはり、クリフォトが所持する聖杯を取り戻さなくてはならないようだ。安心できるのは、命に別状はないということ。三つの聖杯の内二つがあるおかげで、生命機能自体は安定しているらしい。

それと神器に関しては、あの闇ギヤスパードでもいいのか、とにかく闇の化身となることが出来た自身の変化のことをよく知りたいそうだ。

ギヤスパードのやつ……ヴァレリーの聖杯を取り戻すんだって張り切ってたもんなあ。あの力を究明して、自分もクリフォトとの戦いに役に立ちたいのだろう。

そんなギヤスパードに付き添う形でアザゼル先生もグリゴリの研究施設に戻っている。ギヤスパードの神器を調べたいって言ってたもんな。今頃、思う存分に調べて愉悦に浸っているだろう……。

でもまあ、あいつも立派なグレモリー眷属男子に成長したもんだ。出会った当初の引きこもり時代と比べるとえらい違いだね。あいつならヴァレリーをきつと取り戻せるさ。俺たちだって全力であいつに協力するつもりだ。

レイヴェルは本来なら、俺とルフェイとの契約の準備に奔走しているはずなのだが、そのレイヴェルの家とアーサーの話し合いが終わってから契約を進めたほうがいいので、一時フェニックスの家に戻っている。

それはテロリストたちの間に流通している偽『フェニックスの涙』の報告があるためだ。

実際に攫われたレイヴェルから話を伺うことが大事なのだろう。レイヴェルの報告

を元に対策を講じるそうだが……。

もうかなりの量が流通してしまっているし、既に製法も確立してしまっている。製作元を叩き潰すしか、もう止める手立てはないだろうな……。

そんなこんなで、実はチーム「D×D」は全員集合とは、なっていないのだ。

てか、そろそろ期末テストがあるんだよなあ……。勉強しなくちゃいけないことは解ってるんだけど。最近の忙しさを考えるとあんまり出来そうにもない。

いざとなればリアスたちに徹夜で勉強を教えてもらおうか。

そう決心したところで、桐生から声をかけられた。

「ねえねえ。兵藤」

「なんだよ、桐生」

「なんだか最近、アーシアが遠い目をしてることがあるのよねえ」

うっ、やっぱりそうか……。

この前の、アーシアのファープニルとのやりとりで受けた精神へのダメージは、思いのほか根深いものだったのかもしれない。

家でもたまたま目が虚ろになって、言動がアレなことがあるし……。

教室で女友達と一緒にいるときも、そんな風になったりするの。……やっぱり心配

だ。

「前に体育祭の直前にもそんな風になってたことがあるけど、あのときとはまたちよつと違う感じなのよねえ」

相変わらずよく見てるね! でも、それだけアーシアと一緒にいてくれてるってことだよな。

アーシアは結構いい友達を持ったのかもしれない。

「ね、兵藤なんか知らない?」

「あー、心当たりがあるような、ないような……」

うーん、こいつに悪魔関連のこと言うわけにはいかないしなあ。

アーシアとはそういうの抜きでの友達でいてほしいし、なにより異形の世界のことに一般市民であるこいつを巻き込みたくない。

「はつきりしないわね。ま、その顔は心当たりがあるけど、私には言えないって風だからいいんだけど」

桐生さん鋭いねっ!? いや、俺が隠し事が出来ないだけなのかなあ……。うーん、まあこんな感じで察してくれるのはありがたい。

桐生はうんうんとうなずいた様子で、

「とりあえず、アーシアを気晴らしにデートにでも誘ってやってよ」

「デート、アーシアと!？」

あー、それは考えてなかった。確かに気晴らしにアーシアをどこかに連れ出すつてのはいい案かもな。

アーシアの心労の元となっているファープニルに関しては、もうどうしようもないのだし……。

「それいいアイデアだな。今度誘ってみるよ」

と笑顔で返したのだが、

「あんた、ちゃんとデートプラン考えられるの?」

うっ、それを言われると……。

前回のデートコースをそのまま流用つてのも味気ない気がするし、かといって新しいデートコースを考えてる余裕が今の俺にはない。

どうしたものかと首をひねっている……。

「そんなあんたにこれよ」

そういつて桐生が取り出したのは、隣町に新しくできたテーマパークのペアチケットだった。

「おっ、これ最近TVのCMにも流れてたやつだよな。見たことあるぞ」

「アタシ、ここのチケットをペアでたまたま持つてんのよねえ。でも使う機会も相手もないし、あんたにあげるわ」

「マジでっ!? いいのか!」

それはありがたい! アーシアをこういうところにはまだ連れて行ったことがなかったからな。いい気晴らしになるんじゃないだろうか。

「ただし、アーシアと二人で見に行くこと。いいわね!」

「念を押されなくても分かってるよ。ちゃんと今度の休日にアーシアを誘うさ」

よし、アーシアを連れて行ってやるか。子供を持つお父さんの気分ってこんな感じかね。

休日には家族サービスもしなきゃ! みたいなさ。

トレーニングはお休みだな。ま、たまには骨休みするのもいいだろうさ。初代には言っておかないとな。

アーシアはチームの重要な回復役だ。そのアーシアがストレスで体調不良とか、あっちゃいけないもんな。

そう考えるとアーシアの心のケアは凄く重要なことだ。

こんなときこそ、アーシアを守るべき俺がひと肌腕がなくてはならないだろう。

「アーシアが信頼してるあんただから頼むんだからね。しつかりエスコートしてあげてよ」

「おう、分かってるって！」

「こうして、アーシアとデートすることが決まった。」

「おい、兵藤」

「ちよつとお前にも訊きたいんだが」

「なんだよ松田、元浜？」

「アーシアとのデートを考えている最中に、二人が話しかけてきた。」

「最近この町でそっくりさんが現れてるらしいって話、知ってるか？」

「そっくりさん？」

「そう、そっくりさんだ。まあよくある都市伝説的な眉唾ものの噂話だとは思うのだが、最近この町で目撃情報がちらほらあるんだよ」

「そうそう、今一番ホットな話題なんだ」

「へー、最近ルーマニア行ったり修行したりだったから、この町で最近何が流行ってるとか知らなかったんだが……そんなものが流行ってるのか。」

「いや、俺は知らないけど……そんなの都市伝説だろ。やっぱ」

まー悪魔やってる俺が言っちゃいけないセリフだとも思うが、そういう異形関連の出来事って一般人には知られないように情報規制されているし、ただの噂話の類だろう。……と思っていたのだが――、

「俺たちだつてそう思っていたのだがな……」

「クラスの中に聞いてみてもやっぱり大半が知ってるんだよな。それに実際に自分のそっくりさんを見たーなんて話してる奴もいたくらいだ」

「マジでか!?!」

うーん、そういうことが起こつてゐることは……俺たち悪魔関連のことと関係があるのか、それともただの見間違いか勘違いの類なのか……。

「それでオカルト研究部のお前ならば何か知っているかと思つてな」

「いや、知らないな。でも、今日さつそく部長に訊いてみるよ。そういう話があつたかどうか」

「ああ、頼んだぞ! エロしか興味のない俺たちだが、こうも話題になっているとやはり気になるものだからな」

部活の時間、早速リアスに訊いてみることにした。

「リアス、最近自分のそっくりさんを見たくつていう話が話題になつてゐるみたいだけど、

何か知らない？」

「そう、イツセーたちの学年にもその話が話題になっているのね」

「イツセー君のクラスでも話題になっていたんだね」

リアスの学年や木場のクラスもか……。

「……私のクラスでも話題になっていました」

「教師の間でもそのような話題がありましたね。実際に自分と同じ顔の人物を見かけたという方もいたようです」

小猫ちゃんの学年に先生たちの間にまで……。

「うふふ、というよりもこの町の最近のオカルト的出来事だそうですね。それ」

「どうやら皆知っていたようだ。やはり、そっくりさんの話はこの学校の……いや、この町全体でのオカルトのようだ。」

「そっくりさんとか……：そういうった出来事って俺たち悪魔関連では起こってないですよ？」

「一応の確認として訊いてみる。」

「ええ、そのような報告は受けていないわ」

「やはり、都市伝説ではないでしょうか？ そのような話は、どんどん尾ひれがついて一

人歩きしてしまうものですし」

ロスヴァイセ先生は冷静にそう判断していた。

うーん、そうなんだろうか。アザゼル先生がこの場にいれば、もっともらしい考察や解説をしてくれるんだろうけどなあ……。肝心なときにいないんだから、困った先生だ。

「ま、でもオカルト研究部の部員なら、こういったことは積極的に調べなくてはいけないわね。皆、何か新しい情報を得たら報告して頂戴」

「「「「はいっ!」」」」

「アーシア、ずいぶんとご機嫌ね」

ふんふん、と鼻歌まじりに料理をしているアーシアにリアスがそう声をかけていた。

「はい、イツセーさんがデートに誘ってくれたんですっ!」

ああ、よかった。アーシアは本当に嬉しそうだ。デートに誘ってよかった。

「へえ、そうなの。ね、イツセー」

ちよいちよい、とリアスが俺を手招きしてきて……、

「アーシアのことを気にかけてくれるのね。気晴らしになると思っただけで誘ったんですよ?」

と小声で耳打ちしてくれた。

「そうなんです。アーシア、最近学校でも心ここにあらずなことがあるみたいで……」

「そう。ファーブニルの件で、アーシアには心労をかけてしまっていたものね。大丈夫、初代様には私から言っておくわ」

「ありがとう！ リアス」

そう、休日に行っているトレーニングを休むことになっちゃうからな。初代には言っておいてもらえるとありがたい。

ちなみに、それを聞いた初代はトレーニングを休む俺を怒るところか――、

「いいぜい。骨休みも必要さね。それに赤龍帝の坊やを守る者がいて強くなるタイプじゃ。あの嬢ちゃんとの絆を深めておくのもいいじゃろうて。その想いを力に変えることができるじゃろう」

このように仰ってくれたらしい。

なんにしても、

「うふふふっ」

あんな風に乗しそうに笑ってくれるアーシア、久しぶりだったんだ。

いつもの笑顔が戻ってきたみたいで嬉しかった。

「うふふ」

「あら？ 朱乃もご機嫌がいいようね？ なにかあったの？」

「いいえ、なんでもありませんわ」

「と言いながらもちちらをチラチラと見てくる朱乃さん。

はて？ なにかあったかなと思っっていると……。

膝上に乗っていた小猫ちゃんがギョツとつねってきた。

「痛いって」

「……先輩は乙女心が分かっていないんです」

うつ、そう言われると返す言葉もございません。小猫様。

さて……：晩飯も食って、風呂にも入った。リアスたちと寝るにはまだ時間がある。特になにもすることがなくなった夜のこの時間。今はレイヴェルもないから、ルフエイとの契約の話も進まない。

つまり、今は夜の時間は本当にやることがないっ！

むふふ、久しぶりにエロ本を嗜むような時間が出来たってことですよ。

彼女がいるからいいんじゃないかって？ それはそれ、これはこれなのです！

いくらリアスと付き合っているとはいえ、まだそこまでの関係には至っていない。

むしろその状態が続けば続くほど、高校生男子としての性欲はたまつていく一方なわけ……。

最近、戦闘や修行ばかりでそうした欲求を発散させることも出来ずじまいの日々……。新作ものに手を出せる暇がなかったのですよ。

とはいえ、ルーマニアに行つていて最近日本を離れていた俺は、新作をあまり持つていなかったから……。親友の松田、元浜に貸してもらつたというわけだ。

どれどれ、あいつらが言つてた良い娘つてのは……この娘かな？ おおお、この娘おっぱいおつきいなあ……。こんなきわどい水着……キレイなピンク色の乳輪が見えてしまいますぞおお！ いや、あいつらが絶賛するのも分かるわ。この娘エロいっ！ 体つきもそうだが、なんか表情が!!

いやーやっぱエロ本はいいね！ 最近ごたごたしてご無沙汰だったせいか、いつもより妄想が膨らみますなー。

むふふつ、という感じで必死にページを凝視していると、背中にむにゅんとした感触がっ！

「イツセー君、なにをしていますの？」

「朱乃さんっ!? いや、これはその……」

皆と一緒にエロゲーをした俺だけど、こういう場面を見られるのはやっぱり気まずいってうかなんていうか。こういうのは一人で見るもんだって、やっぱ！ 女の子に見られながらとか、楽しさが半減するというか……視線をどうしても気にしてしまうというか。

俺にそういう性癖はないんですっ！

「イツセー君はこういうのが好きなのね……。うふふ、今度るときプールにでも行きましょうか。こういう水着着てあげますわ」

朱乃さんが耳元でそう囁く。

「ほんとですか！ 朱乃さん！」

おお！ 俺の浮気相手になると宣言している朱乃さんの行動は、いつもいつも積極的だ。

しっかし、この水着を朱乃さんが着てくれるのか……。おおっと、興奮しすぎて鼻血が出そうに……。

鼻を押さええながら、朱乃さんを見る。

「ええ、今度の——」

朱乃何かを言いかけていたが、ドアが勢いよく開いたことによってそれは中断され

た。

相手はもちろん——、

「朱乃、何をしているのかしら?」

紅髪をさらに紅に染め上げるほどのオーラを燃えたぎらせているリアスだった。

「あら、リアス。下でアーシアちゃんたちとお風呂ではなかったのではなくて?」

そうそう、リアスたちは今風呂に入る時間だったから、俺はこうしてエロ本を読んでいたんだが……。

「それを言うなら、あなたもでしょう!　いつまで経つても脱衣所に来ないからもしかしてと思つたら——」

あー、朱乃さんだけ抜け出して俺の部屋に来たわけね。そのことをリアスは怒つてるみたい。

そうそう、実は俺は毎日一緒にリアスたちと風呂に入ってるわけじゃない。リアスたちは男の俺の前でも、あの美しいむっちりとした裸体を隠さないからね!　あんなのを毎日見てたら鼻血を出しすぎて体がもたないわけですよ。

「浮気はこうやってするものですわ」

朱乃さんがさらに俺に密着する。ああっ、背中におっぱいが当たって潰れていく感触

がっ……。足も絡ませてきているから、太ももがあたって……いいっ!

「——っ、もう! そうやって私の目を盗んでイツセーとくっ付くのはやめなさいって
言ってるでしょう!」

俺から朱乃さんを引っぺがしてリアスが怒る。

「なによ、そういうリアスだって……」

「だいたい朱乃が……」

ああ、またお姉さま同士で口喧嘩を始めてしまった。こうなると長いんだよなあ
……。っっていうか部屋の外でやって、お願いだから!

「まあ今日はもう遅いし、これ以上はやめておきましょう」

「そうですわね。今日はもう疲れましたし」

良かった。今日は二人のケンカは本格的に発展しなかった! 二人がケンカする
と部屋の空気がなんか薄くなるからね。

「ところでイツセー」

「なんです?」

「その本……」

っ、あつ! 手にエロ本持ったままだった! 彼女の前でエロ本持ってるっの

は、なんかちよつと罪悪感あるし。それにリアスの機嫌だって……。

「あつ……これは、その……友達に押し付けられたもので……決して、そのお……」

「もう、そんなに慌てなくていいわよ。それでこそイツセーだもの。そうではなくてその娘……」

「あつ、この娘かどうかしりました？」

「なんだかイツセーにちよつと似てないかしら？」

え、ほんとに!?

「あら、言われてみればそうですわね」

そう言われて俺も改めて顔をまじまじと見てみるもの――、

「えつ、そうですか？　俺にはちよつと分からないんですけど……」

「なんていうのかしら……顔立ちとか、目元のところか」

「自分の顔のことですから、イツセー君には分かりづらいかもしれませんが、確かにそうですわね」

うーん、言われてみれば……なんとかそう見れるかもしれないってレベルだな。

俺とこんな美少女の顔が似てるとかっていう発想が俺の頭にないからな。なかなか俺の顔とこの娘の顔が結びつかない。

あーでも、目元とかは確かに似てるかもね。

「さて、朱乃。お風呂に行きましよう。アーシアたちも待つていることですし」

「ええ、そうですね。それじゃまたね。イツセー君」

二人はそういつて部屋を去っていった。

よし、リアスたちが戻るまでエロ本見るのを再開しますか。

こうして今日の夜も更けていった――。

「イツセー、御飯よ」

「はい」

ううくん、このリアスを作る朝飯がうまいのなんのつて!

これが日々の生きる楽しみだよなあ……つてなんか惚気になっちゃったな、気を付けよう。

それに今日はアーシアとデートだ! アーシアを楽しませることを第一に考えないと。

さてさて、あれから俺も桐生に色々聞いてデートプランを考えたん。

俺も楽しめるアトラクションとかも結構ありそうだったんだよね。

あと、時期としてはちよつと早いけどクリスマスマスパレードのものもあるとか。

アーシアはお弁当なんかを作ってくれているようで、朝からとても楽しみにしてくれ

ている。

準備も整ったし、先に玄関に行つて待つていると……。

「あら、イツセー君。おはようございます、お洒落していますね」

ソーナ会長が訪れてきていた。

「あ、おはようございます！ ええ、そうなんですよ。今日はデートなんです。ところでソーナ会長はどうして家に？」

「初代に訓練を受けてきたのですよ。今日までいらつしやるようなので……」

「そうなんですか」

あー、初代に修行をつけにもらいに来た。なるほど。

しかし、最近初代に訓練を受けに家を訪れる人たちが多いなあ……。今朝はサイラオーグさんも来ていたし。

実は今、俺の家にほとんどの「D×D」チームがいるんじゃないだろうか。

いないのは匙、ギヤスパー、レイヴェル、アガレス眷属の皆さんぐらいか。あ、家のマスコットキャラのオフィスもいませんね。匙に付いて行ったからさ。

ヴァーリチームも今日は全員集合してるんだよね。初代とグレモリーの地下修行空間で特訓してるな。

アーサーと美猴も話し合いから帰ってきたみたいで……。その結果はどうなったかまだ聞いてないけど……。気になるな。デートから帰ってきたら訊いてみようかね。

「イツセー君も修行を一緒にしていきませんか……。と、言いたいところですが、デートでは仕方ありませんね」

と言つて微笑されるソーナ会長。

「そうですね。すみません」

「いえ、時には休むのもいいでしょう。デート、行つてらっしゃいイツセー君」

「はい!」

ソーナ会長と別れて、待ち合わせ場所の駅前へ先に向かう。

いや、一緒にデートへ出かけてもいいんだけど……。どこかで待ち合わせするつていうのもデートの醍醐味だと思うんだ! まあ、桐生にそう言われて思っただけなんだけど……。

駅前で待つこと数分。

「あ、イツセーさん!」

「よっ。アーシア」

「すみません、待ちましたか?」

ほんとに申し訳なきように言ってくるアジア。そんな顔しなくてもいいのに。
「いや、今来たところだよ」

このセリフ！ デートの定番は守るべきだよな、やっぱ。
「そうですか。よかった」

そう言つてにこにここと微笑んでくれるアジア。今からのデートがほんとに楽しみなんだね。

いつもは見えないようなアジアのお洒落な格好に、俺は驚きつつも、

「かわいいな、アジア」

と素直に口にした。

「は、はい……ありがとうございます。イツセイさん」

アジアは頬を染めて、俯きながらお礼の言葉を呟いた。

恥ずかしかつたけど、言つて正解みただった。

「さ、んじゃ早速行こうか」

「はー」

俺たちが向かう先はテーマパーク・アドベンチャースクエア。

通称『魔法の国』と言うらしい。

この『魔法の国』は四つのエリアに別れていて、それぞれ火の国、水の国、風の国、そして土の国と呼ばれている。

火の国にはジェットコースターやバンジージャンプ等の刺激的なアトラクションが、水の国にはウォータースライダーなどのアトラクションが、風の国には小さな子供でも遊べるような遊び場や軽食店が、

土の国にはグッズ店やパレード用の広場がある。

入口は土の国だから、そこから三つの国のどこに向かうか考えないとな。

入場に時間がかかるかと思っていたけど、事前に桐生からもらったチケットがあつたおかげですんなり入ることが出来た。ほんと、あいつに感謝しなくちゃな。

「さて、アーシア。どこから回ろうか？」

「あ、イツセイさんと一緒ならどこでも……」

ううくん、なんて男冥利に尽きることを頬を染めながら言ってくれるんだこの娘は。

ま、デートで引っ張っていくのは男の役目だよな。それじゃあ……。

「まずは水の国に行くか」

「はいっ！」

とりあえず、気分を盛り上げるために水の国へ。いきなり火の国とかのアトラクシヨ

ン行ってもね……。アーシアは最初からノリノリになれるようなタイプじゃないし。徐々に慣らしていくのがいいだろう。

さて、やってきたのは水の国にある『氷の館』というアトラクションだ。

内容は極寒の地を体感できるような寒い温度設定の施設に、このテーマパークのキャラクターたちがあちこちに描かれてるような感じだ。

入口で防寒着をレンタルして、中へ入る俺たち。

ここに来たのは、まあ目的があつてだな……。

あるキャラクターを探してキョロキョロあたりを見回していると……。

「わー、イツセーさん。ペンギンさんがいますよー」

おおっ!? 早速お目当てのキャラクターに会えた!

このペンギンのキャラクターは、アーシアが好きなマンガ『エデンの緑龍』に出てくるキャラクターなのだ。

どうやら今ここ「アドベンチャースクエア」では『エデンの緑龍』とコラボしているらしく、テーマパーク内や各アトラクションに『エデンの緑龍』のキャラクターが居たりするのだ。

「一緒に記念写真も撮ってもらえるみたいだぞ! アーシア、ほら」

「はー」

ペンギンさんとアーシアが並ぶ。

「はい、チーズ」

パシャ！ ……うん、結構よく撮れたんじゃないだろうか。

「ありがとうございます、イツセイさん！」

「いいって、それよりほら、ペンギンさんにもお礼を」

「ありがとうございます」

ペンギンさんはそんなアーシアの頭をなでてくれた後、俺たちを手を振って見送ってくれた。

「次はどこに行きましょうか？ イツセイさんっ！」

ペンギンさんに会えて、アーシアはご機嫌だ。

んじゃ、次は……。

「あつ、あれいいんじゃないか？」

そう言った俺が指したのはウォーターズライダー。

こういうのって大抵プールとかにあるもんなんだが、さすがは水の国。

説明書きを見てみると二人で乗れるみたいだし、ちょうどいいかな。

「わ、私こういうのも初めてです！」

目をキラキラ輝かせてくれるアーシア。
んじゃ、さっそく行ってみますか！

待ち時間は短く、すぐに乗ることが出来た。

今は寒いし、皆は他のアトラクションに乗ってるせいかな？

係りの人の話をきいて、滑る準備をする俺たち。

席順としてはアーシアが前で、俺が後ろだ。

「ここを持ってばいいんでしょか？」

横にあるバーをアーシアが持つ。

「そうそう、んじゃ……」

俺も持とうかな……というところで――

「それでは、行つてらっしゃーい！」

係りの人に背中を押されてしまった！

「ひゃあああ、イッサーさーん！ーん！」

前に座っていたアーシアの胸をがっしりと掴んでいた！

やわらかい感触がっ！俺の手のひらにつっ！

「ありがとうございますー……」

いやあ……最近アーシアも成長期なのか胸が大きくなっているような……。滑っているときに考えていたのは、こんなことだった……。

「イツセイさん！」

アーシアが俺の名前を叫ぶ。

「さつきは、ごめん！ でもわざとじゃ……」

必死にあやまろうとする俺だが、

「怒ってはいませんよ。でも胸を揉むときは一言言ってください！ 心の準備が必要ですから……」

頬を染めながら恥ずかしそうに、そんなことを言ってくれるアーシア。

か、かわいいっ！ 一言いえば揉んでいいのか……ってそうじゃなくて！

「あー、とにかくごめん！ じゃあ次、行こうか？」

今はアーシアとのデートが第一だ！

「はいっ！」

天使のような笑顔でうなずいてくれるアーシアなのだっ。

お次は風の国！

ここはやっぱ子供向けの広場とかもあるおかげが子供が多いね！

最近、おっぱいドラゴン関連で子供たちと絡むことが多くなってきた。そんな俺にとつては、ここは少しその会場に近いものを感じるな。子供たちのキラキラした目って
いうのかな。ああいうものを感じるよ！

それだけここが子供たちの人気のある場所ってことなんだろうな。

さて、子供たちを見るのはこれくらいにして、アーシアとのお昼だ！

ここはアドベンチャースクエアのフードコート。

昼時に食べると皆がお店に集まって、ゆつくり出来ないからな。少し早めにきて食べたほうがいいと思っただ！……まあ桐生にそう言われたからなんだが。

でも早めに来てても人が多いね。今話題のテーマパークなだけあるわ。

「イツセイさん、あそこなら二人で座れそうですよ！」

アーシアが二人で座れる席を見つける。確かにあそこなら座れるな。

「おっ、ほんとだ。んじゃ座ろうか、アーシア」

「はいっ！」

飲み物を買ってアーシアの席まで戻る。

「待たせたな、アーシア。はい、オレンジジュース」

「ありがとうございます、イツセイさん」

俺はコーラをぐいっと呷る。フードコートに来たのに食べ物を買わないなんてちよつとアレだからな……、飲み物だけでも買ってきたんだ。

そう、俺にはアーシアの手作り弁当があるからな！

最近はずつとリアスが弁当を作ってくれてたから……アーシアの弁当は久しぶりだ！

だからこれが俺にとつてのデートの目玉だったりするんだな。

「はい、イツセーさん、どうぞ！」

「おおつ、サンキュー。アーシア」

ふたを開けてみると……、

「そのどうでしょうか？」

すこし不安げな顔をしてくるアーシアに俺は、

「うん、とつても美味しそうだよ。アーシア」

一口食べてみると、

「やつぱ旨い！　そして懐かしいっ！　ああ、これだよ！　これこそアーシアの弁当だ」

その俺の言葉にはあつと顔を輝かせるアーシア。

「よかったです。最近のお弁当はリアス姉さまのばかりだったので、私のだと美味しくないと言われたらどうしようかと……」

「そんなわけないじゃないか！ アーシアのお弁当も旨いよ。なんかホツとする味だ」
母さんの料理に似てるからかな……やっぱりアーシアは兵藤家の味を着々と継いで
いつてるようだ。

「ではどんどん召し上がってください！」

「おうー」

そのあとはずっとアーシアからあーんをされて、お弁当はすぐに空っぽになった。
だって、ほんとに旨いんだもの！

食べ終わって少し休憩した俺たちは、今度は土の国へ行ってみた。

ここにはパレード用の道であるためか、このテーマパークのキャラクターたちがお
客さんとの触れ合いのために歩き回ってるな。

さて、お目当てのキャラクターは……。

「お、あれじゃないか、アーシア！」

「あつ、いましたー！」

『エデンの緑龍』に出てくる主人公のドラゴンが少し前を歩いていた。今は『エデンの緑
龍』とコラボしてるからな。そのキャラクターたちも歩いているというわけだ。

「一緒に写真を撮ってもらおう、なー！」

「はいっ!」

アーシアは大はしやぎで、ドラゴンさんを追いかけていく……。

『俺たちもあれくらいかわいい見た目ならアーシアに喜んでもらえたのにな』

『赤き龍の帝王がかわいけりや世話ないさ……それとデート中なのに俺に話しかけている暇があるのか、相棒?』

おっと、そうだった。今日はアーシアのことだけ考えるって決めたもんな。

「イツセーさん、はやくきてくださーい!」

「分かった、今行くよ!」

俺はアーシアのもとへと急いだ……。

その次は色々見て回った。

風の国に戻ってコーヒークップやメリーゴーランドに乗ったり、

火の国に行ってジェットコースターやフリーフォール、回転ブランコなんかにも乗っ

たな。

アーシアはどれも大はしやぎして楽しんでくれた。

どれもアーシアは初体験だったからな……新鮮だったし、楽しめただろう。

もちろん俺も楽しかった。

アーシアと一緒に過ごすっただけで、時間がものすごく早く感じたんだ。光陰矢のごとってやつかね？ まあともかく、あつという間に時間は過ぎて行って、クライマックスのナイトパレードの時間が近づいていた――。

季節としては少し早いですが、クリスマスイルミネーションに彩られた通りを、クリスマスの特長衣装に身を包んだキャラクターたちが凱旋していく、ナイトパレード。個性豊かかわいいキャラたちが歌って踊る様子は、まさに今日この日の最後の盛り上がりに対応しているものがある。

このナイトパレードを直接見るのもいいんだが……桐生のオススメは――
「観覧車？　ですか、イツセーさん」

「ああ、そうなんだよ」
そう、観覧車。ナイトパレードの様子も低い位置なら見れるし、高いところからなら――。

「わーっ！　きれいですね、イツセーさん！」

俺たちが目になっているのは星の海――と見紛うほどのきれいな夜景だ。

高いところまで連れて行ってくれる観覧車からなら、パレードの様子だけでなくこの町の夜景も楽しむことが出来る、というわけだ。

それに俺たちは悪魔だからここからでもナイトパレードがよく見える。

アーシアと二人つきりで静かにパレードを楽しむにはこれが一番よかつただろう。

「私、今日はすごく楽しかつたです」

アーシアがほつりと眩く。

「俺もだよ。アーシア」

アーシアを楽しませるつもりがいつの間にか、普通に自分も楽しんでたからな。

まあ女の子とデートで、こういうところに来るのは初めてだから当然っちゃ当然かも
しれないが……。

「お昼のとき、腕を組んでる恋人さんたちが羨ましくて……イツセイさんをお願いした
ら腕を組んでもらつたり……」

「い、いやー、あ、あれは……」

あれは恥ずかしかつたよ！ アーシアの頼みだから断れなくて、腕を組むんだけど
……。

なんていうのかな、こういうデートのときの腕組みって特別なんだ！

しかも周りの大勢の人に見られているし……アーシアの心臓がドキドキしてるのも直に伝わってくるし……。

そしてなによりもアーシアのおっぱいの感触っ！

頭の中がエロエロモードに切り替わらないように、気を引き締めるのは大変だった……。

「私のために、ありがとうございます。イツセーさん」

……っ。

「気付いてたのか？ アーシア」

俺がファープニルのことを心配してアーシアをデートに誘ったことが……。

「はい、イツセーさんは優しいですから……私のことを常に気にかけてくれるのが伝わってきました」

そっか……。出来る限り顔にでないように気を付けてたのにな……。やっぱ演技が下手かな、俺。

「アーシアに元気になって欲しかったんだ……ここるところぼんやりしてるが多かったからさ」

「もちろん分かっていますよ、イツセーさん。でも次は——」

——次は？

「私と一緒に楽しむために、デートに誘ってくださいっ！」

……なんて健気な娘なんだろう……っ。俺にはもつたいないな、でも——、

「俺だつて途中から一緒に楽しんでたぜ。いつの間にか、アーシアとのデートに夢中になってたよ。ほんとは家族サービスの父さんみたいな気持ちでいなきやいけなかったのにな……」

「……イツセーさん」

アーシアが目を潤ませて、俺を見詰める。

「アーシアが絶叫系のマシンが結構好きなのに驚いたり、コーヒーカップでくるくる回し合ったり……そういうのがとつても楽しかったよ」

そう言うとき、アーシアは目を潤ませたまま笑顔で、

「なら、もう恋人たちのデート……してましたね、私たち……」

そんなに恋人たちのデートがしたかったのか。でも、どうして……。

「リアスお姉さまに……負けたくないから。……イツセーさん……っ」

アーシアが目を瞑ったまま顔を近づけてきて——。

きれいな星空の海を背景に、アーシアとそつと唇を重ねた。

あれからアーシアと手をつなぎながら、電車に乗って帰ってきた俺たち……。

なんかもうあのキスで言葉以上のものをお互いに交し合ったためか、俺たちは無言だった。

でもそれは決して気まずいとかではなくて——むしろその反対で、俺たちの距離は今日でずいぶん縮まったんじゃないかと錯覚させるほどだ。

今までも決して離れてたわけじゃないんだけどね。でも、今はアーシアが愛しくてたまらない。

アーシアもそう思ってるのか俺の手を強く握り返してくる。

この幸せな時間が……ずっと続くはずだった。

でも、見つけてしまった……。

黒いさらさらの髪にグラマーな体。大和撫子と見紛うごときその美貌の持ち主を——

「あれって朱乃さん……?」

朱乃さんが、腕を組んで歩いている男を、
そいつは……その男の顔は……。

「あ、あれは……」

アーシア、その先を続けなくてくれ……。
そんなはずない、あれはただの噂話だろう。ロスヴァイセ先生だってそう言ってた
じゃないか……。

そっくりさんなんて、いるわけ……。ない。

「なんだよ？ 赤龍帝の兵藤一誠？」

ニヤリ、と不気味な笑顔を浮かべながら……。そいつは俺たちに話しかけてきたのだっ
た……。

いよいよ戦闘開始ですつ！

イツセー君たちが戦っている間、僕らもピンチに陥っていたんだよ。

イツセー君たちがデートに出かけたあと、僕らはグレモリーの地下練習場で修行していたんだ。

ゼノヴィアは聖剣の鍛錬に、僕はグラムの訓練に。

ただ、グラムは修行で使うことにも命懸けで挑まなくてはいけないからね。

だからあまり修行の進みはよくないんだ。前任者の苦勞が窺えるよ、ほんとに。

それでもやらなくては。邪龍に効果てきめんなのは間違いないんだからね。

でも、グラムを生身で扱うには今の僕では限界がある。それが最近分かってきた。なにか特別な使用方法を模索したほうがいいのかもしれない。

それが分かってきただけでも、初代との修行や今までの鍛錬は無駄ではなかったな。

さて、そろそろゼノヴィアの鍛錬の様子も見に行こうかな？

そう思って魔方阵を起動しようとした時だった――

「木場、修行の調子はどうだ？」

ゼノヴィアが魔方陣から現れた。どうやら彼女も僕と会おうとしていたようだ。

「ぼちぼちだよ。そっちはどうだい?」

「まあまあだな。ま、そう簡単にうまくはいかん」

やはり彼女のほうも苦戦しているらしい。

「そうだね、ゼノヴィア。もう今日は終わりにする?」

てつきり彼女も終わりにするだろうと思ってたのに、今日の彼女はこんなことを言うてきたんだ。

「その前にすこし、試したいことがあるんだが」

「うん、なんだい?」

この時点で疑うべきだったんだろうね、少なくとも不自然だとは思うべきだった。

「木場のグラムを私に使わせてもらえないか?」

ん? 僕のグラムをゼノヴィアが?

「うん、いいけど……」

まあ一時的になら僕が許可すれば、持てるようには……なるかな?

「試してみてください」

グラムに僕の意思を伝えると……ブウンと刀身が震えた。その様はまるで僕の言うことをきいたように見えた。

「はい、一応使えると思うから」

「ああ、ありがとう」

この時の僕はゼノヴィアに使わせてみることで、グラムの新たな使用方法を模索できるかも、なんて考えていた。

僕はゼノヴィアにグラムを……渡した。

「ほう……これが……本物のグラムか」

ゼノヴィアがグラムを握る手に力を込める。

——ブウウン。

グラムがゼノヴィアに呼応して、妖しげな輝きを増す。毒々しいその輝きに僕も思わず目を覆いたくなくなった。

なにか……おかしい。そう思っている、その違和感を説明できるほど理解できてもいなかっただ……。

「ゼノヴィア？」

魔剣を抱えたまま顔を俯けているゼノヴィアに声をかける。

グラムの呪いの波動が強まって、ゼノヴィアの体を紫のオーラで覆う。まさか、グラムの呪いの力を高めているのか!?

「やめろ、ゼノヴィア!」

それ以上力を強めたら君の体が保たないッ!

「ふふふ、これが本物の力か……持つ者も本物の木場がふさわしいな」

なに訳の分からないことをッ!

ゼノヴィアからグラムを手放させようと無理やり奪おうとするも……

「ふんっ」

グラムを一振りして僕の接近を許さないゼノヴィア。

僕はその一振りを身をよじって避けた。

僕に当たらなかつたその一撃は、余波を生み出して地面を切り裂いていった。

まずい、グラムの力を引き出しすぎてる。このままだとゼノヴィアの体は……っ。

「仕方ない、戻れ! グラムよ!」

主である僕の命に従い、ゼノヴィアの手から戻ってくるグラム。

飛んできたグラムを掴み、ゼノヴィアに向けて構える。

「きみは……誰だい？ ゼノヴィア、ではないね？」

こんなことを彼女がするわけがない。普段なにも考えていないような彼女だけど、彼女だって分別はついてる。

「おやおや、ずいぶん言い様だな。私はゼノヴィアだぞ？ 本物のな」
彼女の言葉を訝しみながらも警戒は解かず、剣を構えたままで対する僕。

そんなときだった。ゼノヴィアの背後から魔方陣が出現して、そこから誰かが出てきたんだ。……そして、その人物は……。

「そ、その顔は……!?!」

「初めまして、偽物の木場佑斗」

僕と同じ顔をした誰かだった……。

呆けていたのは数瞬で、すぐ我に返った。

「偽物は君のほうだろうか？ 誰だ、君は！」

グラムを突き付けて問いたです。

「本物の木場優斗だよ。偽物にはそんな区別もつかないのかな？」

安い挑発だ。そんなものにはかまわず、僕は敵の正体について考える。

相手は最近町の噂になっていたというそっくりさんなんだろう。

「木場か、こっちは奪取に失敗した。そっちは？」

「こっちも失敗したよ。まさか、聖剣がひとりでに動き出すなんて……もしかしたら、あの聖剣にも聖十字架のように独自の意思でもあるのかな？」

「……らしいな。まったく二人ともが揃って失敗するとは……あとでイリナたちになんと言われるか……」

「問題ないよ。ここで僕があいつを倒せばいいだけの話なんだから。ゼノヴィアは先に帰っておいて」

「ああ、分かった」

そんな会話を繰り返したあと、ゼノヴィアのそっくりさんは転送魔方陣を使って何処かへと飛んだ。

僕は改めて、目の前の偽物を見る。

実物を見るまではにわかには信じられなかったが、ほんとうに姿形はそっくりだ。端から見ただけでは両者に区別はつきまい。

だが、問題は外見だけでなく――、

「ふふ、僕の能力について気になるのかい？　じゃあ、試してみようか。偽物と本物、どちらが本物に足りえるほどの力をもっているのかを――」

どうやらかなり自信があるようだ。それは相手の内にある力を感じ取ることからも理解できる。

……相手は僕と同じぐらいの――いや、もしかしたら――。

そのことを予感して、僕は冷や汗をかく。

「ふふ、正しく現状を理解できているようだね。グラムはしまったほうがいいんじゃないかな？　ここが保たないだろう」

確かにここは強固なバトルフィールドというわけではない。グラムを実戦レベルの出力で振り回せば、あつという間に辺り一面の全てが切り刻まれて、細切れになってしまおうだろう。

それに修行でグラムを使って消耗しているというのもある。向こうの僕はグラムを盗ろうとしたことから、持つてはいないと考えられるので……得物はもちろん――。

「バランス・ブレイク
「禁手化」

両者ともに聖魔剣を出す。向こうの聖魔剣もその聖と魔の入り混じった波動から察するに本物だ……。

「さあ、戦闘開始だ!!」

今、二人の騎士の戦闘が幕を開ける――。

「あ、朱乃さん……どうして……」

混乱して言葉が出てこない……、どうして俺とまったく同じ姿をしたやつと朱乃さんが……。

「イ、イツセイ君!? では、こちらのイツセイ君は……それにアシアちゃんも……」
向こうの朱乃さんもかなり混乱しているようだ。

それは隣にいるアシアも同じ。

していないのは――目の前にいるニヤニヤと口元を歪ませている俺だけだ。

「簡単だよ、朱乃さん。俺が本物で、あいつが偽物だ」
な、なんだと！ お前がにせもんだろうが！

「ふざけんな！ そつちが偽物だろ！」

いがみ合う俺たち。朱乃さんとアーシアは狼狽えている様子で、どちらが本物の俺か分からないようだった。

そりや見た目はほぼ一緒だもんな……、自分を外から見ると結構気持ち悪いぜ。それぐらい似ていやがる！

「おいおい、気持ち悪いはないだろう……。ま、俺もおんなじ気分だけだな」

なつ……こいつ俺の心を読んだのか？！

「ちがうちがう、お前の考えそんなことなんて分かるってことだ。俺はお前の……いや、それはいいか」

「言いかけてやめるなよ、気になるだろ」

軽口をかわしつつ、俺は相手を注意深く観察する。

アーシアが隣にいるんだ。絶対にアーシアを危険な目にあわせるわけにはいかない。

ここにはアーシアを守るのは俺しかない。だからしっかりとしなくちゃな！

目の前にいるこいつ……松田や元浜が言ってた町の噂ってやつは本物だったってことか。

そっくりさん……確かに目の前にいるこいつは姿形は俺にそっくりだ。

——いや、外見だけじゃない。中身もだ。

感じる。あいつの内側から俺と同じ龍のオーラを。

……まさかあいつも赤龍帝だったのか!?

「そうだよ、俺が赤龍帝だ。本物のな」

ガシャン!

そういつてあいつは神器を出す。俺と同じ、それは紛れもない赤龍帝の籠手だ。

「だから本物は俺だったの!」

また俺の考えてたことを……おれそっくりなのは頭の中もってことなのか?……それとも……。

俺も赤龍帝の籠手を出す。

二人ともが神器を出したことでアールシアと朱乃さんがどちらが本物かますます区別がつかなくなったようだ。

だがそんな中俺のなかのドライグが確信をもって皆に告げた。

『本物はこつちの相棒だ』

「ドライグ!？」

ドライグが皆にその根拠を告げる。

『簡単なことだ。相棒のニセモノは作れても、赤龍帝の籠手の複製を作れても、俺の魂のコピーは誰にも作れはしないのさ。それは聖書の神ですらできなかったことだ』

そうか……聖杯を使ってあいつらが俺の神器のレプリカを作った。けど、そのなかにドライグはいなかった。それは誰にも不可能なことだったからだ。

つまり、目の前のこいつの中にも——たとえば、龍のオーラを纏っているからといって……。

向こうのあいつが偽物だと分かったからか、朱乃さんがあいつから離れて、こつちへ駆け寄ってくる。

「バレちゃ仕方ないな。確かに俺は今はまだ偽物さ、今はまだ……な」

「どういうことだ?」

「簡単なことだよ……ここでお前を倒せば、俺が本物だツ!!」

そういつて相手が俺に向かって突貫してきた!

「——ツ!!」

壁にぶつかつた衝撃で息を吐く。

「——かはっ!!」

そのまま駅のホームをぶち破つて俺は上空へ投げ出された。

なんとか馴れない悪魔の翼を使って、空中で態勢を立て直したものの——。

「あ、やべ!? ここは——ツ」

そう、ここは人間界だ。こんな派手なこととして注目を集めるのはまずい。それになにより俺たちの戦いに一般人を巻き込んで……。

しかし、俺はすぐに周囲の異変に気付いた。

「あれ……人がいない……?」

そう、さつきまで駅を賑わせていた人たちがごっそりいなくなっている。

それに空の色も紫がかっていて——まるで冥界の空のようだ。

「どうなってるんだ!?!」

混乱する俺。

あいつはそんな俺の様子を見て、にやりと嫌な笑みを浮かべながら教えてくれた。

「ここは結界の中だよ、俺たちの戦いに犠牲者を出すわけにはいかないからな、連れ込ませてもらったぜ」

そういうことかよ。どうやらあいつにも人間を心配する優しさってものがあるみたいだな、ちよつと安心したぜ。

『いや、奴の言葉を額面通りに受け取るのはまずいぞ、相棒』

ドライグが今度は俺にだけ聞こえる声で話しかけてきた。

どういうことだよ？ ドライグ。

『ここは結界の中ということだろう。奴が事前に準備していたものなら罠の一つでもあるのかも知れんし、助けも呼べんぞ』

そうか、奴にとつて有利な戦場に連れ込まれたのかもってことだな。

それに俺は警戒し、禁手化へとなる。

「禁手化か？ パランス・フレイクならこつちも」

俺とあいつ。二人の神器から同じ音声が流れる。

『Wellsh Dragon Balance Breaker
!!!!!!!』

龍の波動をまき散らし、赤き鎧をお互い身に纏う。

俺と同じ……禁手化……。

ごくつ……と生唾を飲む。

罠があるかも？ 助けなんて来ないって？

……そんなの。そんなの、それでも俺があいつに勝てばいいだけの話だ！

偽物相手に二回も苦戦するわけにはいかないぜ、ドライグ!!

『よく言った、相棒!! それでこそ赤龍帝だ』

俺と同じく偽物に思うところあるドライグは、俺と一緒に闘志を燃やしてくれた。

「はっ」

「だあー!」

お互い接近して打撃戦。

まずは相手の出方を覗う。紅の鎧を使うのは相手の実力を確かめてからだ。

そう思っていたが、戦い始めてすぐ、そんな必要はなかったと俺は感じていた。

「はっ、ぐう、おらっ!!」

「よっ、せいっ、ふっ」

こちらの攻撃はあまり当たらない。しかし相手の打撃はなぜかガードできずにモロに食らってしまう。

なんでだ？　なんでこっちの攻撃が当たらない!?　まるで事前に俺の攻撃する箇所が分かっているみたいにひよいひよい避けやがる!!

そしてなんで俺はあいつの攻撃に殆ど当たっちゃまうんだ?　……サイラオーグさんと戦ったときだつてここまで一方的に殴られるなんてことなかったのに。

『相棒、上だ!』

「うおっと」

ドライブに呼び掛けられ、なんとかすんでのところで避ける。

「はあはあはあ……ぜえぜい」

少し殴りあつただけで、こっちの息はもうあがつていた。

「どうした?　全然菌ごたえがないな。ドライブがついていながら、その程度なのか?」
でもあいつは全然余裕そうだ……。そりやそうだな、俺ばかり殴られてこっちの攻撃はほとんど当たらなかったんだから。

今のこれだけの手合せで分かった。あいつは俺より強い。

スピードもパワーも俺より上だ。

パアアアア!

緑の癒しのオーラが届き、俺の痛みが消えていく……。

「イツセーさん!」

アーシアだ。どちらが本物なのか、戦闘の中でも見失わないようにしていたんだろ
う。

「ありがとう、アーシア。でも下がっててくれ!」

アーシアの回復はありがたいが、こいつに対してアーシアを守りながら戦えるとは到底
底思えなかった。

「心配しなくてもアーシアは狙わないさ、嘘だと思おうならもう少し離れて戦うか?」

信用できないが、戦闘にアーシアを巻き込む危険性は少しでも避けたかった。

「ああ、そうしよう」

お互いに頷き、ここから離れよう……

「イツセーくん、私も戦いますわ」

朱乃さんが俺の隣に並ぶ。

「朱乃さん……ここは俺一人で戦います」

「でも……」

押されっぱなしの俺が言っても説得力ないよな……でも――、

「あいつは強いです。……あなたを守りながら戦う余裕がないほどに」

「――っ！」

そうなのだ。俺とあいつが本気を出して戦うなら紅の鎧の戦いになる。

あの形態の高速戦闘に朱乃さんはついてこれないだろう……。

そのとき、彼女は俺にとって足手まといになってしまう。

「ごめんなさい、朱乃さん」

「イツセーくん……」

俺の言葉に納得してくれたのか、朱乃さんが俺から離れる。

「さ、今度こそ行こうか」

「ああ」

俺たちは誰も巻き込まない戦場へ向かって飛んで行った……。

一時撤退ですっ!

「はあ……はっ、はあ……」

同じ騎士、

同じ聖魔劍、

しかし息を切らしているのは……。

「そらっ、どうしたんだい？ 木場佑斗ッ！」

本物の僕の方だ。

「くっ」

なんとか相手の剣を捌いて、追撃を躲す。

「まだまだいくよっ」

ヒュ、ヒュ、ヒュン、

敵の剣戟が奏でる風切り音が遅れて届く。

それだけ敵の攻撃が速い。

僕はほとんど反射だけで、もはや躲している。疲弊した体でここまで動いているのは

奇跡だった。

「はああつ」

追撃をかわすために敵の足元に聖魔劍群を生やす。

これが当たるとは思っていないが、敵も回避するために後ろに飛び退くはず——つ!?
「はっ」

事前に予測していたかのようにタイミングよく飛んでこちらの後ろに回り込んだっ!?

——不味い背中から斬られるツ!

「ぐうっ」

なんとか身をよじって相手を正面に見据え、その攻撃を防ぐ。

体勢を崩されることを恐れて、剣を受けた勢いを利用してそのまま後ろに跳ぶ。

飛ばされたといっても過言ではないが、おかげで距離はかせげた。

体力の回復をしたところだがそんな僕の考えを見透かすかのように、相手は追撃してくる。

しかし、それはさせない。このままこの距離を維持する!

僕は氷の聖魔剣を出すと、地面に突き刺して眼前に氷の壁を造り出す。

相手は壁を越えてくるために飛び越えるか、左右どちらかに避けるか。

どちらにしても相手はその動作のために一瞬隙が出来る。

だから僕ならその隙を作らないように……、

「炎の聖魔剣よ！」

偽物は炎の聖魔剣で氷壁を壊したようだ。

……そう、炎の聖魔剣で氷を溶かす。僕ならそうしてくれると思っていた!

あたりは氷が熱で溶かされたことよって蒸気がたちこめ視界が悪くなっている。

この状況は僕も相手も姿が見えない。でも周りの蒸気を吹き飛ばしつつ敵を攻撃す

る方法がある!

「風の聖魔剣よ！」

僕は風の聖魔剣を造り出し、振り下ろした。

「おおおおおおお！」

ブウン!

霧を晴らしていくと同時に、この聖魔剣はかまいたちを生み出す。

相手は剣で受けるからダメージはないだろうが、風圧で吹き飛ばされて今以上に距離

は稼げるはず！

僕の放ったかまいたちが霧を斬り進み、いよいよ相手に当たるかというところで

……、

リプレッション・カーム

「風 凧 剣」

偽物がかまいたちを周囲の霧もろとも吸い込んで消し去った。

あれはフェニックス戦で僕が使った聖魔剣か！

しまった、と思った時にはもう遅く、僕は再び距離を詰められていた。

(なぜだ……僕が何の聖魔剣を出したのか相手は分からなかったはず……それなのにな

ぜ一瞬で風 凧 剣を出せたんだ……まるでこちらの……)

そう考える間もなく再び僕たちは斬戟を繰り広げる。

相手の剣を受け、躲し、受け流す。

もはや攻撃する隙も余力もない。

なぜ僕がここまで窮地に陥っているか。

それは聖魔剣の特性による。

聖魔剣とはその名の通り、聖と魔の二つが組み合わさっている剣だ。

ただの魔剣とは違い、聖なる力も込められているため悪魔に対して効果的なのが特徴だ。

そのため聖魔剣に傷つけられると、悪魔は内側から徐々に聖なる力に焦がされていくのだ。

僕の偽物は悔しいことに僕よりも速い。

だから攻防を続けるうちに防ぎきれず、躲ききれない小さな傷が僕に出来ていった。

本来はそれらの小さな傷ではダメージを受けることはない。

しかし相手の得物が聖魔剣である以上、必然的に聖なるダメージを受ける。

それがいくつも積み重なり蓄積していくことで、僕の体は徐々にキレを失っていった。

そうになると、ただでさえギリギリのところまで致命傷を避けてきたのに、聖なるダメージにより疲弊していった体では、敵の攻撃を防ぎきることは当然難しくなる。

小さな、だが決定的な差。

それが両者に大きな隔たりをもたらしていた――。

こんな風に諦めたような思考になっているのも、聖なるダメージによつて精神も徐々

に弱らさせているからだろうね……。

聖魔劍……敵に回すとこれほど厄介な代物だったとはッ……。

「理解出来たようだね？ 僕と君の力の差を」

僕が相手に勝てないと思ひ出していることに感づいたのか、そんな挑発的なことを奴は口にする。

「随分と余裕だね。僕にはまだ……」

——グラムが、と言いかけて相手に先に言われる。

「グラムがあるって？ でもここでは使うわけにはいかなないと言っただよ。それに今更使ったところで、僕にはもう勝てない。それも分かってるんだろう？」

——それも分かっていた。

ここまで疲弊した体ではもうグラムの真の力を引き出せない。

なにより、グラムを使ったところで相手に当てなければ意味はない……。

……もう僕にはあいつを斬りつけることが出来るほど速く動けない。

……ここまでか。

そう思ったとき、意外な人物が僕の目の前に現れた。

「君はッ……」

「っ……」

『だが、奴のほうが実力が上だ。このままではやられてしまうぞ』

そんなことは分かっているよ、ドライグ。さくて、この状況どうしたもんかね？

自分と同じ能力のやつと戦うっていうのはある意味やりづらいな。

こちらが何をやるか相手が何をやるかが分かっているから、戦闘は攻防の読み合いになる。

要は向こうのほうが賢いからやりづらいってことなんですけどね！

……はいはい、いじけずに頑張りますよ。

でもお互いまだ本当の力を出していない。

俺の偽物でバランス・ブレイク禁手化も使えるってことは多分……紅の鎧も使えるのではないだろう

か。ユーグリッドの野郎はレプリカだからダメだったが……もしかしてあいつもそうなのか？

俺がそうしたことを頭の中で考えていると、

「お互いそろそろ本気を出そうじゃないか。成れ、紅の鎧にッ！」

あ、やっぱりお前もなれるのね！ 考えて損した。んじや遠慮なく——、

「——我、目覚めるは王の真理を天に掲げし、赤龍帝なり！」

真『女王』になるための呪文を唱えていく。

「無限の希望と不滅の夢を抱いて、王道を往く！ 我、紅き龍の帝王と成りて——」

「「「「カーディナル 汝を真紅に光り輝く天道へ導こう——ツ」」」」
 『Cardinal Crimson Full Drive!!!』

ドンツッ！

俺は周囲にドラゴンのオーラを迸らせ、紅の鎧となる。

あー、また無駄なパワーを周囲に放出してるな……初代のじいさんに怒られる。

紅の鎧になるとパワーの上限が上がるから、その分普段の禁手状態よりも力を放出しちゃうんだよな……気を付けないと。

「へえ、それが本物の真『女王』か……」

あれ、俺はなったのにあいつは紅の鎧にならないのか？

それを言おうとしたその時――、

「おーいイツセー」

懐かしい墮天使の総督の声が聞こえてきた。

「つてアザゼル先生……あれ？」

向こうのほうからもアザゼル先生が飛んでくるような……。

「つと」

こっちに向かってきたアザゼル先生が俺の傍へ降り立つ。

「で本物のイツセーはどっちだ？」

『こちらが本物の相棒だ』

ドライブが宝玉部分から先生にも聞こえるように音声を発した。

「よしよし、んじゃ目の前のあいつらが俺とイツセーの偽物か」

向こうを見ると、もう一人のアザゼル先生と偽物の俺が二人で並んで立っていた。

「俺も自分の偽物に会うのは初めてだ」

「そうかい？ まあ面白くていいじゃないか」

向こうの先生は笑って肩をすくめていた。

「決着をつけるかい？　今ここで」

先生が光の槍を出して構える。

「いや見逃しといてやるよ。そつちにも戦う準備つてもものが必要だろう？」

両者がにらみ合う時間が続く……。

先に目をそらしたのは本物の先生だった。

「ふう、んじや逃げるぞイツセー」

「え、逃げるんですか？」

「このままここで戦っても仕方ないだろう。それに他の連中の様子も気になるしな」

「つてことは俺だけじゃなくて皆の偽物も……」

「そういうこつた。んじやあつちと合流するぞ」

そう言つて先生は俺を連れて飛び立っていく。

ぐんぐんと偽物たちと距離が遠ざかる。

次は必ず――、

再戦を胸に抱いて俺たちは離脱していった。

「どーだった？　本物の赤龍帝の鎧は」

ブーステッド・ギア・スケイルメイル

「やっぱり本物のほうが凄味があったな。あれが真なる天龍の鎧か」

「データは採れたんだな?」

「ばっちりだ。真『女王』も見せてもらったしな」

「んじやこつちも一旦戻るぞ」

「はいはい」

「先生、皆のところに行く前に朱乃さんとアーシアを」

「わーってるよ、そつちはもう二人とも回収済みだ。お、いたいた」

先生が見つめていた先には……お、木場とアーサーじゃないか! アーサーは戻ってきていたんだな。

でもなんで二人であんなところに……。

「木場はイツセーの家に行ったのか」

そう、先生と向かっていたのは俺の家だ。でもここからはいるはずの皆の気配を感じられない……。

「せ、先生! リアスや皆はどこに!?!」

「ここは結界の中だよ。この家もお前の家そつくりではあるが本物じゃない。おそらく

敵が造り出した偽物だろうな」

そうか、ここは結界の中なんだった。

「結界の中!?! ここはいつたい……どうしてイツセーくんやアザゼル先生が……」

木場はまだ状況をよく分かってないみたいだ。

俺たちが揃ったからかアーサーが口を開く。

「それでは、ここから離脱しますよ」

アーサーの持つ聖王剣コールブランドで空間を切り裂いた。この裂け目から元の世界に戻るのか?

「木場にもあとで事情を説明してやる。んじゃ行くぞ」

俺たちは先生に促されるまま元の世界に帰って行った。

元の世界に戻ってみると、そこは見慣れたオカルト研究部の部室だった。

リアスや朱乃さん、ソーナ会長やサイラオーグさん、更にヴァーリまでいるじゃないか。

「ほかの皆は?」

「アーシアは別室で襲撃を受けた者たちの治療をしているわ。他の皆も同様に襲撃を受けたみたい」

やっぱりなのか。あいつら一体何者なんだ……。

「そうだ、そっくりさんのことは先生に訊いてみたいと思ってたんですよ。あいつら一体何なんですか?」

「推測でしかないがおそらくあいつらは……」

「それは私から説明しましょう。堕天使の総督」

ブウンと不気味な音をさせながら転移してきたのは――、

「てめえは?!」

「お久しぶりですね、兵藤一誠。宣戦布告に参りました」

ユーグリット・ルキフグスだった。